

**日本建築学会北海道支部  
2010年度 通常総会**

日時 2010年5月13日(木)  
会場 北海道第二水産ビル

---

日本建築学会北海道支部

## 日本建築学会北海道支部 2010 年度総会議案

### 2009 年度事業報告

2009 年度は学会の新法人化への移行年に当り、大きな転換期を迎えようとしている。これまでに本部と支部との連結会計は実施済みですが、更に制度的な見直し作業に入っている。来年の 3 月頃までには大きな骨子が出来上がると思われませんが、支部規定などで大幅な見直しに迫られるのではないかとされる。

そのような過渡期ではあるが今年度の支部活動はおおよそ以下の 3 項目に要約される。

- ① 支部活動の強化（会員数の増強、財政の改善と強化）
- ② 支部体制の見直し（各種委員会、地方組織の立て直し）
- ③ 支部活動の活性化（支部発表会、各賞、建築教育）

特に最近の経済不況に伴い個人会員、法人会員の減少は著しく、会員数の減少を食い止めることは急務で、これまで以上に学会の PR 活動が必要になっている。また、支部活動の見直しは主に各専門委員会を中心に行われてきたが、さらに学術委員会、常議員会などの主要なテーマとして検討することが必要となろう。支部研究発表会は例年色々と工夫がなされ盛況に推移している。

本部で各支部の活性化を目的に「特色ある支部活動」の調査研究のテーマ募集を行っているが、2010 年度も前年に引き続いて北海道支部のテーマが採用され、今後の研究成果が期待されている。

### 1. 支部運営の諸会合の開催

#### 総会

期日 2009 年 5 月 22 日  
会場 北海道建設会館  
出席正会員 53 名（委任状 16 通）

当支部地域在住正会員 866 名の 30 分の 1、28 名以上の出席により成立

2008 年度事業報告及び収支決算、ならびに 2009 年度事業計画方針案及び予算案を審議し、異議なく可決承認された。

#### 常議員会

5 回開催

#### 常任幹事会

5 回開催

#### 選挙管理委員会

1 回開催

### 2. 学術系委員会の活動

#### 2.1 学術委員会（主査：角 幸博君 委員数 14名 委員会開催数4回）

本委員会は、本部学術推進委員会および学術推進委員会拡大幹事会の情報を各専門委員会および研究委員会に伝達するとともに、各専門委員会・研究委員会から企画及び活動の報告を受けた。また、支部研究発表会実行委員会の企画の審議と承認、特定課題研究、建築文化週間事業の選考、特色ある支部活動企画の申請および北海道支部技術賞の選考をおこなった。

- ・特色ある支部活動企画 2 件が提出されたが、1 件のみ本部に申請し、「北海道における漁業関連建築の歴史的研究」（歴史意匠専門委員会）（補助額 71.5 万円、事業期間 2010 年 4 月～2011 年 3 月）が採択された。

- ・ 建築文化週間：「みんなで始める地震防災対策」（都市防災専門委員会）および「歴史的建造物の見学「建築散歩～厚岸編」」の2件を採択した。
- ・ 支部技術賞：12月15日～1月15日の募集期間に応募がなかったため、さらに募集期間を2月16日まで延長した結果4件の応募があった。審査の結果、昨年の表彰が0であったことを受けて、本年は3件を対象とした。

## 2.2 専門委員会の活動

### 材料施工専門委員会（主査：桂 修君 委員数22名 委員会開催数6回）

2009年度は、専門委員会を2ヶ月に1回程度の割合で、計5回開催した。委員会では、本部材料施工本委員会など各種委員会報告や諮問事項について検討し、材料・施工に関する情報や意見の交換を行った。また、興味ある話題や今日的な話題について事前に担当者を決め報告をしていただき、最近の研究動向について意見の交換を行った。寒中コンクリート小委員会、寒中指針改定WGに協力し、「寒中コンクリート施工指針・同解説」の検討を行った。

2009年4月21日（火）に「新千歳空港新築工事」の現場見学会を、2009年9月4日（金）に「北海道大学工学部共用実験棟」の建物見学会をそれぞれ構造専門委員会と共催で行った。

### 構造専門委員会（主査：田沼 吉伸君 委員数23名+ガザバ-1名 委員会開催数2回）

定期的に委員会を開催して構造関連の情報交換を行い、下記の活動を行った。

#### 1) 委員会開催

委員会を2回行った（6月16日、12月11日）。また、必要に応じて通信会議を行った。

#### 2) 見学会

(1)2009年4月21日「新千歳空港国際線ターミナルビル」

参加者40名 構造専門委員会・材料専門委員会共催

(2)2009年9月4日「北海道大学大学院工学研究科共用実験棟」

参加者25名 構造専門委員会・材料専門委員会共催

(3)2010年2月8日「新千歳空港国内線増築工事における鉄骨柱大組立ロボット溶接作業：北栄興業(株)恵庭工場」参加者20名 構造専門委員会・日本鉄鋼連盟共催

#### 3) 勉強会

12月11日委員会終了後、前田憲太郎委員の担当で下記についての勉強会を行った。

「国土交通省建築基準整備補助金事業と日本鋼構造協会応募事業について」

### 環境工学専門委員会（主査：羽山 広文君 委員数28名 委員会開催数4回）

本委員会は以下の活動を実施した。

1) 学位を取得した若手研究者および学会賞受賞内容の研究成果発表会を行った。

2) 第4回環境工学系・卒業論文発表会 EGGs09を開催した。参加者は82名、40題の発表が行われた。また、小笠原隆一氏（北海道電力）から基調講演をいただいた。

3) 高齢化社会に対応する生活環境整備の課題検討及び取り組みを実施するに当たり、特定課題研究「住環境の変化が身体へ与える影響の実態把握」を本部助成で実施した。

4)主催講演会：「パッシブデザイン手法を用いた北方型省エネルギー建築の開発・推進」（参加者138名）、後援講演会：（社）空気調和・衛生工学会主催の地区講演会「持続可能建築と知的生産性」（参加者69名）を行った。

### 建築計画専門委員会（主査：門谷 眞一郎君 委員数15名 委員会開催数4回）

「超高齢化社会の積雪寒冷地における居住環境整備の課題」について協議を重ねた。関連で年度中に計画した認知症対応グループホーム「しづく」の見学会について、2月20日（土）に施設長と事前協議を行った。施設の性格から大人数の見学会は不可とのことで、2010年度春、少人数で実施と方針変更した。なお、課題に関する研究情報集約を目指したWebアプリケーション（Moodleによるポータルサイト）の利用強化のためのLive CD/DVDの開発は、上半期に一応のカタチが成り、下半期において、USBストレージデバイスにそのイメージを展開することに成功し

ている（成果の一部は第 83 回北海道支部研究発表会に報告の予定）。なお、2010 年 3 月より、前述のポータルサイトの更新に着手している。

#### **都市計画専門委員会（主査：小林 英嗣君 委員数 12 名 委員会開催数 3 回）**

都市計画専門委員会では、第 1 回委員会（7 月 15 日）に活動内容の具体的な検討と役割分担をおこなった。8 つの自治体を対象とした約 10 件の具体的な活動メニューが整理された。これらは 2009 年度から 2010 年度にかけて、随時実施することとした。これを受け、第 2 回委員会（10 月 29 日）に実施企画の絞り込みと企画内容の検討をおこなった。このなかから、整開保のあり方に関する勉強会として、「都市の将来像を考える意見交換会」を 2 回計画し、12 月 10 日に実施担当者による詳細な調整のため第 3 回委員会を開催した。意見交換会は、釧路（2 月 22 日）と中標津（3 月 23 日）において実施した。このほかに、委員勉強会として、7 月 27 日 28 日に主査の研究室主催で開催された特別講義への参集を実施した。9 月 10 日に日本都市計画学会北海道支部主催でおこなわれたセミナーに共催した。

#### **歴史意匠専門委員会（主査：中渡 憲彦君 委員数 17 名 委員会開催数 4 回）**

例年のとおり、道内各地域の歴史的建造物の現状を把握することに努め、保存・活用等に関して委員相互の情報交換を行い、必要に応じて学会として社会や住民に発言する活動を行った。今年度採択された「特色ある支部活動：北海道における建築歴史学の研究史」を実施し、報告書としてまとめた。2010 年 2 月 16 日には工業高校巡回講演「北海道の建築作品を探る その歴史・構造・そして強み」（水野信太郎君・於 室蘭工業高校 4 3 名）を行った。

#### **北方系住宅専門委員会（主査：鈴木 大隆君 委員数 16 名 委員会開催数 4 回）**

2009 年度は北海道の住宅にまつわる現状認識、問題などについて検討を行った。今後はこれからの住まいづくりの視点についての考えを取りまとめるところである。また、北海道における「住まい」とそこでの「暮らし」のテーマを改めて考えるための活動として、11 月 7 日に「これからの住まいと暮らしを考える『住まい・暮らし見学リレー』」を実施した（15 名参加）。

#### **都市防災専門委員会（主査：草苅 敏夫君 委員数 19 名 委員会開催数 2 回、通信委員会 6 回）**

地域との連携活動については、地震防災対策をテーマにした建築文化週間事業「地震防災体験学習 in あつま」の企画・運営を行った（厚真町、10/3）。さらに、函館市都市建設部建築指導課が企画した「みんなで始める地震防災対策 地震防災セミナー in 函館 地震に備えた住まいと暮らし～阪神・淡路大震災の語り部に伺う～」(函館、2/10) に対して協力をを行い、南委員が語り部の聞き手として参加した。自然災害調査については、特定研究課題委員会として冬季の津波避難対策研究委員会を組織して活動を開始した。また、北海道支部緊急連絡体系の整備を行った。

## **2.3 特定課題研究委員会の実施**

(2009 年度より)

#### **冬季の津波避難対策研究委員会（主査：南 慎一君 委員数 8 名 委員会開催数 8 回）**

冬季の津波避難対策の実態を把握するために、市町村の津波避難対策実態調査結果等の分析を行った。また、津波避難ビルのガイドライン等の文献資料をもとに、建築物に作用する津波外力の影響評価について検討を行った。次に津波避難施設の使用実態を把握するため、浜中町をケーススタディ地区として冬季と夏季に施設の立地条件、避難路、建築構造、温熱環境などについて調査を行った。これらの結果を基に津波浸水予想地区における避難対策の検討課題について整理した。

## 2.4 本部からの支部助成金による研究委員会の実施

(2009年度より)

住環境影響の実態把握委員会(主査:羽山 広文君 委員数6名 委員会開催数 3回)

本委員会は以下の活動を実施した。

- 1) 夕張医療センターの老健施設入所者を対象に、入浴時の身体への影響について、また訪問診療・訪問看護の受診者に対し、患者の生理データと温湿度の調査を開始した。
- 2) 福井県衛生環境研究センターおよび福井県介護実習・普及センターの職員を招き、入浴環境が身体に与える影響について公開委員会を開催した。
- 3) 研究成果を日本建築学会、空気調和・衛生工学会、日本公衆衛生学会へ計8件発表した。この内、1件は日本公衆衛生学会総会優秀演題賞を受賞した。

## 2.5 特色ある支部活動の実施

北海道における建築歴史学の研究史(担当委員会:歴史意匠専門委員会 水野 信太郎君)

当「特色ある支部活動企画」北海道における建築歴史学の研究史は、2009年4月より翌2010年3月までの単年度として、日本建築学会本部より活動助成対象に選定された。これを受けて本歴史意匠専門委員会は、通常の専門委員だけでなく越野武北海道大学名誉教授を正式な当委員として迎え、総勢18名による委員会構成をとった。本年度内に全委員の会合を3回、これとは別に在札幌・小樽・江別の委員による幹事会を同じく3回開催した。その結果、北海道における建築物に関する論文・文献・講演・集会・映像・その他の総リストを完成した。さらに研究成果の時代別・地域別・種類別など、さまざまな視点からの論考を7編ほど執筆した。なお本研究活動の成果は、日本建築学会北海道支部研究発表会にて報告する予定である。

## 3. 委託調査研究の受託

該当なし

## 4. 支部研究発表会の実施(主査:瀬戸口 剛君 実行委員会委員16名 委員会開催数5回)

### (1) 開催要領

日本建築学会北海道支部 第82回研究発表会

日時:2009年7月4日(土)9:30-19:30(受付9:00-)

場所:北海学園大学工学部(札幌市中央区南26条西11丁目1-1 TEL:011-841-1161)

### (2) 実行委員会

- ① 実行委員会委員 [主査]瀬戸口、[構造]千葉、串山、[材料施工]谷口、胡桃沢、[環境工学]佐藤、村田、[建築計画]門谷、真境名、[都市計画]岡本(幹事)、[歴史意匠]武田、小林、[北方住宅]谷口(幹事)、松村、[防災]堤、高井、[事務局]菊地
- ② 実行委員会開催回数 3回(第1回10/29、第2回1/30、第3回プロ編4/24)
- ③ 実行委員会スケジュール

10/29:第1回実行委員会、11月末日:建築雑誌入稿、1/30:第2回実行委員会、1月:建築雑誌開告、2月下旬:HP作成、3月上旬:HP原稿募集、4/15:原稿締め切り、4/24:第3回実行委員会プロ編、5月上旬プロ編校正、5月中旬:CD印刷入稿、6月中旬:CD発送、7/4:支部研究発表会

### (3) 研究発表会

開催日時:2009年7月4日(土)9:30-15:30(午前9:30-12:00、午後13:00-15:30)

論文総数 136題(開催時期を夏にしてから過去最高の論文数)

① 種別論文数

A原稿（講演研究論文）98題、B原稿（資料研究論文）28題、  
C原稿（計画・技術報告）9題、D原稿（委員会報告）1題

② 分野別論文数

材料施工13題、構造43題、防災1題（他に構造にも含まれる）、環境工学27題、  
建築計画14題、都市計画14題、建築システム2題、建築史・建築意匠17題、北方系住宅5題、

③ 所属別論文数（第一著者および第二著者で判断、卒業生を含む）

北海道大学65題、北海道立北方建築総合研究所19題、北海道工業大学13題、  
室蘭工業大学9題、釧路工業高等専門学校8題、北海学園大学5題、東海大学旭川校3題、  
東北大学3題、札幌市立大学2題、北海道職業能力開発大学校2題、その他7機関1題

④ 支部研究発表会 会計報告

	事業収入	1,254,105 円
	事業支出	1,019,355 円
支部研究発表会	事業収支	+234,750 円

(4) 特別企画

開催日時：2009年7月4日（土）15:30-17:30

テーマ：「夕張再生まちづくり支援への建築専門家の役割」

会場：北海学園大学工学部3号棟1階11番教室

- (1) 夕張市の再生まちづくりの状況 藤倉 肇（夕張市長）
- (2) 鹿ノ谷倶楽部の保存再生に向けての支援 角 幸博（北海道大学）
- (3) 炭鉱遺産の再生支援 吉岡宏高（札幌国際大学・NPO 炭鉱（ヤマ）の記憶推進事業団）
- (4) 夕張老健施設「希望の杜」での建築環境技術支援 羽山広文（北海道大学）
- (5) 都市コンパクト化へ向けた公営住宅の再生支援 松村博文（北方建築総合研究所）

司会：瀬戸口剛（北海道大学）副司会：谷口尚弘（北海道工業大学）記録：岡本浩一（北海学園大学）

参加者：100名程度

※特別企画の報告→

<http://news-sv.aij.or.jp/hokkaido/INFO/2009/tokukikaku09repo.pdf>

(5) 懇親会

開催日時：2009年7月4日（土）18:00-19:30

会場：北海学園大学工学部生協食堂

参加者数：45名（一般38名、学生7名）

5. 表彰

5.1 北海道建築賞

(1) 北海道建築賞委員会（主査：大萱 昭芳君 委員7名 委員会開催数 3回）

本委員会は1975年、北海道支部に表彰制度が設けられて以来、道内に建設された建築（アーバン・デザイン等の領域も含む）の中から本賞に相応しい作品を選考し、2009年度で34回目となった。選考の基準としては、作品の有する「先進性」、「規範性」および「洗練度」の視点を掲げている。

今年度は、7名の委員のうち3名の新委員を迎えて、4月15日（水）の応募開始から10月30日（金）の授賞式および受賞記念講演会まで、以下に示す一連の活動を通して第34回北海道建築賞を実施することができた。

5月7日（木）：第1回委員会 応募状況の確認および応募推薦作品の選定・スケジュールの

確認。

- 6月19日(金)：第1回審査会 応募16作品。ただし、内1点は既に解体され現地審査不可のため除外し、審査対象として15作品を確認。書類審査で現地審査対象作品8作品を選考。
- 7月23日(木)：第1回現地審査 「岩見沢複合駅舎」(岩見沢町)・「イコロの森」(苫小牧市)
- 7月28日(火)：第2回現地審査 「愛国農場の家」(帯広市)
- 8月22日(土)：第3回現地審査 「札幌市民ホール」「西野の家」「光の矩形」「芒居」(札幌市)
- 9月4日(金)：第4回現地審査 「ROJI」(余市町)
- 9月9日(水)：第2回審査会 最終選考を行い以下の結果となった。
- ・ 北海道建築賞「岩見沢複合駅舎」西村 浩君/㈱ワークヴィジョンズ
  - ・ 北海道建築奨励賞 該当なし
- 10月30日(金)：北海道大学遠友学舎にて授賞式および受賞記念講演会が開催され、設計者自身による授賞作品のコンセプト構築と設計プログラムへの展開、その実施プロセスについて詳しく解説され有意義であった。

審査員：

主 査：大萱 昭芳君

委 員：小篠 隆生君 加藤 誠君 久保田克己君 佐藤 友哉君 鈴木 敏司君  
山田 深君

## (2) 受賞者

北海道建築賞

西村 浩君(株式会社ワークヴィジョンズ)

作品名「岩見沢複合駅舎」の設計

## (2) 審査経緯

北海道建築賞委員会は3名の委員が交代した新体制で、2009年5月7日、札幌市内で平成21年度の第1回委員会を開催した。審査プロセスとスケジュールについて昨年に順ずることを確認したうえで応募状況を検討し、委員からの応募推薦対象作品を支部主催の「建築作品発表会」他から7作品選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

第一回審査会は6月19日に札幌市内で開催され、以下に示す16応募作品に関する審査の冒頭で、「④北海道洞爺湖サミット国際メディアセンター」は計画通り解体され実体が存在しない作品であるため、初めての事案として審査対象としての可否が議論された。その結果、現地審査の不可能な作品は、審査の公平性の確保および審査結果への第三者検証の観点から、審査の対象としないことを確認した。したがって、審査の対象作品としては、④作品を除く15作品が残った。

応募作品及び応募設計者(順不同)：

- ① 知床斜里複合駅舎(川人洋志君他/川人建築設計事務所他)
- ② GARDEN ECO FACTORY(藤島 喬君/㈲TAU設計工房)
- ③ 鳳龍山長勝寺無量寿堂(中舘誠治君他/㈲エヌディースタジオ他)
- ④ 北海道洞爺湖サミット国際メディアセンター(大山政彦君他/㈱日本設計他)
- ⑤ 芒居(中山眞琴君/㈱ナカヤマアーキテクト)
- ⑥ 東京理科大学長万部キャンパス女子寮(垣田 淳君他/㈱竹中工務店設計部)
- ⑦ 愛国農場の家(小西彦仁君/㈲ヒココニシ設計事務所)
- ⑧ 新富良野プリンスホテル・温浴施設(林 正彦君/㈱ミックプランニング)
- ⑨ ホテル&スパリゾート ラピスタ函館ベイ(高橋秀秋君他/大成建設㈱設計本部)
- ⑩ 佐藤忠良記念子どもアトリエ(井端明男君/㈱アトリエアク)
- ⑪ イコロの森(鈴木敏司君/㈱アトリエアク)
- ⑫ 札幌市民ホール(菅原秀見君他/㈱北海道日建設計)

- ⑬ ROJI (灘本幸子君／灘本幸子建築設計事務所)
- ⑭ 光の矩形 (五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計)
- ⑮ 岩見沢複合駅舎 (西村 浩君／㈱ワークヴィジョンズ)
- ⑯ 西野の家 (佐野天彦君／アトリエサノ)

審査の作法は多数決ではなく議論を通じて全委員の同意を得ること、評価の視点は従前同様、コンセプトと設計プログラムおよび実体的表現の「先進性」・時間・空間軸における自然を含めた人間社会に対する「規範性」・それらを統合して美の創造を目指す「洗練度」の3項目とすることを最初に確認し、現地審査対象作品を選定する書類審査に移った。応募資料を読み解きながら、各委員による個別評価と活発な議論の末に、現地審査該当作品(順不同)として以下の8作品、⑤芒居(中山眞琴君／㈱ナカヤマアーキテクト) ⑦愛国農場の家(小西彦仁君／㈲ヒココニシ設計事務所) ⑩イコロの森(鈴木敏司君／㈱アトリエアク) ⑫札幌市民ホール(菅原秀見君他／㈱北海道日建設計) ⑬ROJI(灘本幸子君／灘本幸子建築設計事務所) ⑭光の矩形(五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計) ⑮岩見沢複合駅舎(西村 浩君／㈱ワークヴィジョンズ) ⑯西野の家(佐野天彦君／アトリエサノ)が選定された。

現地審査は委員7名の過半の参加を原則に4回に分けて実施された。7月23日に岩見沢から苫小牧で第1回、⑮岩見沢複合駅舎と⑩イコロの森。7月28日に十勝で第2回、⑦愛国農場の家。8月22日に札幌市内で第3回、⑫札幌市民ホールと⑯西野の家⑭光の矩形⑤芒居の住宅4件。9月4日に余市で第4回、⑬ROJI。いずれも天候に恵まれ、周辺環境から建築空間の内外まで詳細に観察し、設計者やクライアントとの意見交換を含めて有意義な現地審査となった。

最終審査会は9月9日、6委員出席1委員委任のもと札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。審査に先立ち次のことを確認した。計画および設計に関与した委員は、当該作品に対する見解表明を避け個別討議の際には座を外す。選考審査は、各委員が作品に関する見解を述べたのち、作品ごとの自由討議に移り多角的視点から活発で真剣な議論がおこなわれた。

これまで述べた一連の選考審査を経て、個々の作品の評価と意義が整理され、本委員会の総意として北海道建築賞および同奨励賞について以下の決定をした。

- ・北海道建築賞に「岩見沢複合駅舎」西村 浩／㈱ワークヴィジョンズ
- ・北海道建築奨励賞は該当作品なし

現地審査8作品のうち7作品は残念な結果となったがいずれも佳作であり、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

・⑤芒居：山麓の自然林に接して鋼板で覆われたキュービックでシンプルな造形は、アプローチに敷かれた鋼板と共に自然な赤錆色の質感が美しい。内部もボーラスな室空間が螺旋的に続く吹抜けで、陶板敷きの床と鉛薄板貼りの壁が工芸的な光の質感を見せる。木構造の可能性に挑戦した各所に見られるRC的な形態操作とパノラマビュー開口。現代建築の論理性を超えようとする先進性と洗練された素材美の表現手法は高く評価されたが、表層的との指摘も受けた。

・⑦愛国農場の家：モジュールに従いリズムカルに並列配置された黒いボックス空間の外観は、人工的な造形美を対置して、広がりのある十勝の大地に新しい農村風景を生み出した。二世代の施主のライフスタイルを読み解き、生産緑地から自立した住環境を都市的手法の伸びやかな構成で実体化した先進性は高く評価された。一方、機能性と規範性の観点から外部仕上げに疑問が指摘されたことが残念だった。

・⑩イコロの森：北海道の気候に適したガーデニング素材とそのデザイン手法の提案、発見、学習のためのランドスケープデザインは、バックヤードと共に運営・維持も含めてサステイナブルな場所を創造しようとする大きな構想が具現化され、その先進性は高く評価された。同時に広大な敷地に配置された建築計画は、木造の軽やかな表現を評価しながらも、場所とのきめ細かい応答に具体性を欠いたメッセージ性の弱さが問題とされた。長い時間をかけて有機的空間に進化していくことが予感される。

・⑫札幌市民ホール：7年間の仮設という条件から派生したコスト制約の大きい計画だが、従来の華美に流れた公共建築のあり方とは反対に、無駄をそぎ落とし工夫を重ねて質素ながらも良質のデザインに昇華させた努力と規範性、さらに、鉄骨造ながらホールの遮音性や振動伝播を制御した技術力の先進性は高く評価された。しかし、ホワイエ空間、研修諸室など市民に広く開かれ

てほしい空間が閉鎖的、外観的にも大通公園に面して閉鎖的で札幌中心部の都市景観への積極的貢献が果たせなかったことが惜まれる。

・⑬ROJI：六面体に三か所の切り欠きを施したシンプルな外観の道路側1・2階に小さな喫茶店を配した店舗付き2階建て住宅建築である。この作品の特徴は、玄関から微妙に屈曲しながら貫通する2枚の白い壁で構成された住宅部の吹き抜け動線空間である。イタリア南部の路地空間をイメージした白く乱反射する光の濃淡は、この小住宅に有機的な息吹を与えていた。施主の夢と希望に必死に込めようとして格闘していたら自然に導かれて生まれたデザイン、との作者の弁には熟練した大工の技を引き出した魅力があった。デザインが意識化され論理化されて深められる今後の作品に期待したい。

・⑭光の矩形：前衛作家としての位置を確立している作者による新作は、若い家族のための木造小住宅である。大壁への反射光をもう一枚の壁に設けた大きな開口によって切り取った光の矩形で内部空間を視覚的に統御している。内部からは意図的に外部への視線をさえぎり、外部との関係性を光の矩形の変化に限定した手法は、静寂な内部空間を創出しているが、住まい手に自己完結的な時空間を強いている。しかし、クライアントは作者を信頼し、むしろそこに生ずる自由度の高い現実を楽しんでいた。敷地との関係性において、究極的に閉ざされた建築のあり方に疑義が出されたが、隅々まで細かい配慮がなされた内部は、その洗練度の高さが評価された。

・⑯西野の家：若い家族のために超ローコストで計画された木造小住宅である。構造材と仕上げ合板の定尺寸法から割り出されたモジュールで得られた、縦長の6面体空間を3枚の部分床で再構成した機能空間は、仕切りのない単一空間でもあり、水平に続くテラス空間と繋がって視点の垂直移動に伴い多様なシーンを展開する。一見難解に見える空間を自由闊達に使いこなし、若い建築家との共同作業で創り出したライフスタイルに満足されるクライアントの姿を通して、若い建築家とクライアントによる新しい住宅建築の可能性を感じた。今後の作品に期待する。

(文責：大萱 昭芳)

#### (4) 審査講評

##### 北海道建築賞 「岩見沢複合駅舎」

地域のための建築にどのような価値が必要なのか。その答えを与えてくれた建築である。

4年前のコンペで、主催者である JR 北海道は、「北海道における駅周辺の衰退した現状から、駅が地域における街づくりの核となるように、各自治体と一体となり駅及び周辺整備に取り組みながら駅の復権を目指している」とコンペの目的を述べている。

これに応えるためには、単に建築自体のデザインがどうであるかという視点ではなく、駅が周辺の市街地に対してどのような意味を持ち、そこでの活動が周辺に波及して、駅を建築することが周辺の市街地やそこで活動する人々に失われてしまった活力を再び起こさせるような「取り組み」が必要なのである。

まず、建築の側で持たなければいけないのは、不特定多数の人々が単に列車に乗り降りするという行為だけではなく、多様な活動をするための利用にあらゆる対応するということである。この建築には、すべての部分で人間が使うこと、人間が触れること、そして空間を感じることを考慮したデザインが施され、様々な要素を持った複合駅舎として質の高い空間が構築されている。街に向けて大きく開放されたカーテンウォールのガラス壁からは、内部での人々の活動が感じられ、夜間や柔らかな光が、薄暗かった駅前に暖かな光を提供している。また、自由通路部分では、将来の街の発展を支える地域との連絡をスムーズにさせるだけではなく、両側に開かれたガラス壁やその十分な幅員を支える構造が、やはり開放的で軽やかな印象を与え、従来感じる事が出来なかった視点から駅や街の中心部の景観を気づかせようという作者の意図が行き届いている。

さらに、昇降口に至っても、床仕上げを内部から駅前広場に連続化させ、通常は工事区分なども問題からなかなか実現できない、駅舎から周辺地区への物理的連続性を人間の心理的、体感的感覚の部分にまで配慮したところなど、作者がこの建築で何が必要であったのかを明確に表し、しかもその作法は秀逸と言えるものになっている。

建築に使われている素材の扱い方についても、先進的な作法が感じられる。用いられた素材は、鉄(古レール)、ガラス、コンクリート、レンガである。これだけ聞くと、もう100年前の初期近

代建築のごとくであるが、実は、この素材を用いながら、必要な機能を限られた敷地に構成するために、その素材の特徴をもっとも活かしながら構成しているのである。

駅舎機能で求められる不特定多数の人々が大量に出入りする部分と市民利用などである一定時間人々が滞留して使う部分とを同時に成立させるためにガラスカーテンウォールと光の透過性を持たせつつ、空気の遮蔽を行うレンガ壁という二重の壁の構成で、室内空間の熱的居住環境を制御しているのである。レンガに関してもその積み方を必ずしも建築を構築するための構造要素として見せるだけでなく、透過性を持った壁の表現をレンガとフロストガラスと交互に積むことで実現し、ガラスの外皮とその壁とによって、外部、半外部、内部を積層的に構成し、北海道の積雪寒冷の気候に対応させつつ、駅という不特定多数の人々が日常的に出入りする部分と、滞在し、活動する部分とを併せ持つ、この建築の特徴を平面計画のプログラムとして構成している。素材自体に付着した様々なイメージや意味をいったんそぎ落とし、意匠・構造・設備を一体的に考え、既存の素材に現代の技術を導入して新たな使い方と意味を与えた建築設計としての総合性と先進性に対する作者の高い見識が感じられる。

しかし、これだけの評価に留めるのでは、片手落ちである。これらの建築に対する先進的かつ洗練された構成と表現だけでは、「駅が地域のまちづくりの核となる」ことはできない。

重要なのは、建設のプロセスにある。全国規模の公開コンペによって選出された設計者は、自分の案を実現するということがこのプロジェクトに付託された内容ではないということに最初から気がついていて。

「地域を繋ぐ」ということが設計コンセプトになっているように、市民や駅利用者をもこの建築プロジェクトに参加させ、市民、企業、行政が協働しつつ、地域のシンボルである駅舎の姿や利用を考え、それに関わっていくことが、疲弊してしまった地方都市の中心市街地を再生するひとつの手がかりになるということを実践したことが、評価される。国内外から 5,000 名近い参加者を集めた刻印レンガプロジェクトへの参加のシステムや、仮駅舎への感謝を表すイベントから発展した新駅舎や駅前広場で展開される数々の市民の企画によるイベントは、まさに市民が主役で街のシンボルが誕生した証である。その活動の舞台である駅舎には、駅という機能だけではなく、地域の公共（パブリック）としての空間の質を獲得されている。建築家は、単に今までの単体の建築の設計に向かう従来の建築家像を越えた、様々な要素や活動をまさに繋いでいく分野にもその能力を発揮し、建築が出来上がった後の時間に対しても関わっていくというこれからの新たな建築家像を伺わせており、そのことでも高く評価されてよいものである。

地域につくられる公共的な建築には、長い年月や、人々との関わりに耐え、地域の資産になっていくことが求められる。この作品には、きっとそのような建築になっていくであろうと予感させるものが埋め込まれている。それは、この建築に関わった設計者をはじめとする関係者の想いが読み取れる建築を体感できるからであろう。ここに、北海道建築賞を贈り、その栄誉を讃えたい。

(文責：小篠 隆生)

## 5.2 卒業設計優秀作品（日本建築学会北海道支部賞）

### (1) 卒業設計優秀作品審査委員会（主査：菅原 秀見君 委員数 6 名 委員会開催数 1 回）

2009 年度卒業設計優秀作品審査委員会においては、各委員が個々に候補作品について審査を行い合同審査対象作品を選定し、「大学」「短大・高専・専門学校」「工業高校」の分野別に候補作品各々について合同において再審査し、合議の上、各賞を選出した。

本年度は、「大学」の部ではインパクトのある作品がなく金賞は該当作品なしとし銀賞 2 点、銅賞 2 点とした。「短大・高専・専門学校」の部では、今年度から札幌市立高専が札幌市立大学としての応募に変わった影響もあり候補作品が 3 点と少なく、それぞれ金、銀、銅賞とした。「工業高校」の部では金賞 1 点、銀賞 2 点、銅賞 1 点の選定となった。

また、講評の論点を確認し、各選考作品の講評者の担当を決定した。

審査員：

主 査：菅原 秀見君

委 員：小倉 寛征君 上遠野 克君 小西 仁彦君 齊藤 文彦君 中山 眞琴君

## (2) 受賞者

### 大学の部 (応募作品数 14点)

- ・銀賞 大瀬戸雄大君：北海学園大学工学部建築学科  
作品名 — Heritage — Project in Niseko
- ・銀賞 堀内 敬太君：北海学園大学工学部建築学科  
作品名 — とともに紡ぐもの
- ・銅賞 林 号太君：北海道工業大学工学部建築学科  
作品名 — うつろいの家
- ・銅賞 清水謙次郎君：室蘭工業大学建設システム工学科  
作品名 — the other side — 旭川買物公園再編計画—

### 短大・高専・専門学校部 (応募作品数 3点)

- ・金賞 瀬戸 孝典君：札幌建築デザイン専門学校建築工学科  
作品名 — PRIMING ～起爆剤～
- ・銀賞 後藤 祐貴君：釧路工業高等専門学校建築学科  
作品名 — そこに適える：杜の城
- ・銅賞 伊藤 大介君：札幌建築デザイン専門学校建築工学科  
作品名 — 透過・等価・通過 ～隣人との空間～

### 工業高校部 (応募作品数 8点)

- ・金賞 若林 賢君：北海道名寄産業高等学校建築システム科  
作品名 — Nayoro Sunpillar Station 746
- ・銀賞 尾形 友也君：北海道札幌工業高等学校建築科  
作品名 — Place for finding oneself
- ・銀賞 池本 進君：北海道札幌工業高等学校建築科  
作品名 — 森の中の小規模小中学校
- ・銅賞 小林 未来君：北海道苫小牧工業高等学校建築科  
作品名 — Stars☆ and the Moon)

## (3) 審査講評

### 大学の部

銀賞・大瀬戸君

北海道ニセコのスキーリゾート地に計画された宿泊施設である。近年多くの外国人が別荘やコンドミニアムを購入している地域でもある、これらの場所は建物どうしが隣接し自然との関係が薄れてきている。そこでこの計画はニセコの自然や気候環境を体験でき四季の変化を楽しむ施設として森の中に考えられ、光や樹木、冬期は積雪2.5mとなり建物がすっぽりとうまり屋根の上が通路となるなど様々なシークエンスが展開される空間となっている。美しい自然の中に樹木をよけながら計画された樹状の平面、さらに床を浮かせることにより最低限の建設影響で自然を守る姿勢など、内部空間と合わせて美しいコンセプトがよみとれる秀逸な作品である。

(文責：小西 彦仁)

銀賞・堀内君

夕張の炭鉱住宅を舞台とした介護施設の提案。プレゼンテーションが淡白であり作品性とし

ては地味な作品であるが、介護のあり方、炭鉱住宅の再生など、社会性のある問題意識に立ち魅力的な空間を提案している。炭鉱住宅群の住棟間を内部化し介護施設、食堂、学習の場、図書室など様々な機能を挿入し新たな人のつながりを生み出す発信型の介護施設である。コミュニティの崩壊から環境問題まで多くの問題に対する具体的な回答を現実的でやさしさのある空間でまとめている力量が評価に値した。

(文責：菅原 秀見)

#### 銅賞・林君

建築は実体を伴う。風土や時間までも引き連れる。現実には建築界はどうであろうか。何か実体感のないアイデアだけの本質を忽せる作品が主流になりつつある。各界からの批判が多いのはこのためである。実体になると急に脆弱で美しくないのだ。都市をつくる強度がないと読み替えても良い。さて「うつろいの家」を見た時にそのカテゴリーかと思った。しかし読み解いているうちに非常に未来を感じたと同時に美しい形態を想像できたのだ。プレゼンテーションだけが美しいのではない。文句なく建築としてのセンスが結実している。家具や道具と建築との間にはまだまだ解決しなければならない問題はあがあるが、「建築」に希望の光をあてた一作であることは間違いないだろう。

(文責：中山 眞琴)

#### 銅賞・清水君

北海道内の多くの都市が抱える中心市街地の空洞化という問題に対し、旭川を舞台にその原因とされる自動車社会という現実を逆手に取って解決を図ろうという意欲的な作品である。特にこの作品を魅力的なものにしている点は、建築内において人と自動車を等価なものとして扱い、それらを立体的に関係付けることで今までにない新しい空間を提案していることが挙げられる。また、新しい空間を実現するためにヴォイドやメッシュによる外皮という建築手法を効果的に取り入れていることも高い評価を得た。以上を総合的に判断して銅賞にふさわしい作品であると判断された。

(文責：小倉 寛征)

### 短大・高専・専門学校の一部

#### 金賞・瀬戸君

旭川の買物公園に集客の起爆剤として公園をはさんで商業施設を配置した。買物公園のアクティビティと商業施設のアクティビティが立体的に直交しており、新たな賑わいの核の誕生を予感させるものがある。特に買物公園をはさんでステージと客席が向かい合う劇場では劇場としての機能にとどまらず、建築と都市を結ぶダイナミックな力を持っている。提案されている空間は都市を正方形に切り取っているが、コンセプトを明快にするには都市と建築の境界をあいまいにする方法もあったと思う。

(文責：菅原 秀見)

#### 銀賞・後藤君

伊達市の文化・歴史的財産の再構築を、ガラスと鉄骨の表層の中に「杜の城」として複合的に計画した作品です。

内部空間での図書館の書架の構成、記念館の展示スペース等に歴史・文化・自然をモチーフにしたすぐれたインテリアデザインがありますが、各フロアで完結するだけではなく、重層的に展開され、ガラスのファサードを通し、外部にまで表現され、又石垣の土台部分も建築的な抽象化がされていたなら、伝統的なモチーフ+現代的素材以上の提案が出来たと思います。構成、表現共にすぐれた作品です。

(文責：上遠野 克)

#### 銅賞・伊藤君

成熟した住宅地において、密度をほぼそのままに見直すことで、新たな市街地のありようを

提案している。住宅と敷地境界の関係を見つめ直し、小さな住戸をばらばらに配置することで、住棟間が隙間から新たなアクティビティの場となり賑わいを生むということだ。人口の増加しない地域での市街地の再編は、施設の集約に目が行きがちであるが、散漫とすら感じる全体の配置が、はらっぱのような懐かしさや賑わいを感じる空間となっている。各建物も様々な住人を想定し綿密に計画されており、現代的なプレゼンテーションによって現代の提案として成功した秀作である。

(文責：齊藤 文彦)

## 工業高校の部

### 金賞・若林君

作者は若林君という。この作品を作れることのできた学生の名前を知りたかった。というくらい過去のどの作品よりも遥かに越えた超 A 級の作品である。へたをすると大学の部より迫力があつた。ホーム、駅舎、アーケードを連結し、新たな商業空間を生みだそうとする意欲あるコンセプトでまとまっている。名寄の現時点での問題点を引き出し、新たなデザインで治癒し商店街と駅をリンクし活気を呼び戻そうとする真面目で凛凛しい作品である。ダイヤグラムのスケッチも上手だし、プレゼンテーションも一級である。建築形態は高校生のレベルを超えている。将来、決して形態操作だけにデディケートしないよう願う。もっともっと建築は広い視野が必要であるから。建築界が孤立しないためにも。

(文責：中山 眞琴)

### 銀賞・尾形君

生徒にとって生活の場といえるほど長い時間を過ごす学校。自らを発見する場としての学校を考え、空間にゆとりを与え、しつらえにも配慮したことが特色となっている。単調になりがちな学校のデザインに、2階エントランスまでのアプローチ部を楽しくするための壁を設けるなどの工夫も見られる。また、ただ広さを確保するのではなく、校舎の配置をL型としたり、時計塔を設けるなど、学校生活に多様性を確保する工夫をしており、思いの詰まった作品であることが評価された。

(文責：齊藤 文彦)

### 銀賞・池本君

「森の中に建つ小規模小中学校」に適した学校運営方式と空間構成を丁寧な考察により決定していることが高い評価を得た。中でも従来の片廊下型校舎の持つ問題点に対し、建築空間に「まとまり」「連続」「変化」を与えることで解決を図るという提案と、それを実現した平面計画に設計の力量を感じる。また、複雑な屋根形状、構造材や外装材の選択には周辺環境への誠実な配慮を読み取ることが出来る。結果として森の中に建つ学校にふさわしい表情を作り出すことに成功している。図面表現もしっかりとした技術を感じさせるものであることから銀賞がふさわしいと判断された。

(文責：小倉 寛征)

### 銅賞・小林君

この計画のよさはさすがしくおおらかなところである。展望台の設計であるが、カフェや雑貨など複数の店舗が入る複合施設となっている。大きな楕円空間と直方体の空間のバランスも良く吹き抜けやオープンテラスなどがところどころに配され心地よい。特に楕円空間の屋上テラスは開放的でタイトルのように夜空の月や星を見るには絶好の場所となっている。全体的にバランスよくまとめられた秀作である。

(文責：小西 彦仁)

### 5.3 優秀学生・生徒（日本建築学会北海道支部賞）

2009年度道内大学・短大・高専・工高優秀学生・生徒として以下の学生・生徒を表彰した。

木村 勇気君・山田 健介君：北海道大学工学部環境社会工学科建築都市コース  
中村 夢乃君・大場 諒平君：北海学園大学工学部建築学科  
佐藤 航君・相澤佳那恵君：北海道工業大学工学部建築学科  
捻金 宏太君・本田 祐介君：室蘭工業大学工学部建設システム工学科  
細川 拓未君・石垣菜津美君：東海大学芸術工学部建築・環境デザイン学科  
佐々木 誠君・打田 知大君：道都大学美術学部建築学科  
種村 直子君・成田 梓君：札幌市立大学デザイン学部デザイン学科空間デザインコース  
加藤 寛基君・和田 大昌君：釧路工業高等専門学校建築学科  
太田 美鈴君：北海道職業能力開発大学校建築技術システム技術科  
白戸 孝典君：北海道職業能力開発大学校建築科  
池本 進君：北海道札幌工業高等学校建築科  
久田 拓雅君：北海道札幌工業高等学校定時制建築科  
森越 真理君：北海道小樽工業高等学校建設科建築デザインコース  
布施孝一郎君：北海道小樽工業高等学校定時制建築科  
藤田楊子君：北海道函館工業高等学校建築科  
大島匠平君：北海道函館工業高等学校定時制建築科  
栗原 竜也君：北海道旭川工業高等学校建築科  
村中 直人君：北海道旭川工業高等学校定時制建築科  
小林 未来君：北海道苫小牧工業高等学校建築科  
剣持 恵君：北海道苫小牧工業高等学校定時制建築科  
菅野 大輝君：北海道帯広工業高等学校建築科  
佐々木隆明君：北海道釧路工業高等学校建築科  
寺島 良成君：北海道名寄産業高等学校建築システム科  
前田 恭平君：北海道美唄工業高等学校建築科  
神谷 康平君：北海道室蘭工業高等学校建築科  
永井 尚幸君：北海道留萌千望高等学校建築科  
細川 厚志君：北海道北見工業高等学校建設科

### 5.4 日本建築学会北海道支部功労賞

本賞は、当支部の維持・発展にとって功績・功労のあった支部に所属する会員に対して感謝の意を表するとともに、更なる支部活動の活性化と意識の高揚を図ることを目的としている。2009年度は、最も長期にわたり支部会員を継続された以下の1社の法人・賛助会員を表彰した。

札幌建築デザイン専門学校

### 5.5 日本建築学会北海道支部技術賞

(1) 北海道支部技術賞選考委員会（主査：角 幸博君 委員数10名 委員会開催数3回）

選考委員：支部長、学術委員会委員長、各専門委員会主査の計10名

開催日時：第一回 1月26日（火）17：30～18：00

第二回 2月22日（月）10：00～11：00

第三回 3月29日（月）17：00～17：30

場 所：日本建築学会北海道支部会議室

第3回北海道支部技術賞選考委員会を3回開催した。2009年12月15日（火）～2010年1月15日（金）17：00を応募期間としたが申請がなく、第一回委員会で2月16日（火）17：00まで延長す

ることとし、選考委員は支部長と学術委員長とし、応募内容によって別途委員を依頼することとした。延長の結果、4件の応募があった。第二回委員会で、4件の内容を検討し、1件は候補技術の結果データがまだ不十分で今後の検証を待つべきとの判断があった。他の3件については、いずれも実用実績があり、かつ冬季における雪庇防止装置、換気廃熱を利用した融雪システム、簡易な温熱シート利用のコンクリート養生方法など、北海道支部技術賞にふさわしい内容であることが評価された。ただ、本賞は原則1者であることが議論され、昨年該当がなかった点、および今後の本賞へ応募への啓発、さらに表彰対象者数の但し書きを鑑み、本年度は3件の授賞とすることとした。第三回委員会で、第二回委員会の選考過程及び結果を了承した。

## (2) 受賞者

北海道支部技術賞	本間弘達君(伊藤組土建株式会社) 川本清司君(有限会社北欧住宅研究所)
北海道支部技術賞	表彰技術名—建物の換気廃熱を利用した融雪システム技術の開発 杉山 雅君(北海学園大学) 深井 公君(積水ハウス株式会社)
北海道支部技術賞	表彰技術名—新温熱シートを用いたコンクリートの養生方法 小林敏道君(株式会社コバエンジニア) 表彰技術名—屋根に形成される雪庇防止装置の開発

## 6. 北海道建築作品発表会の実施

### (1) 北海道建築作品発表会委員会(主査:米田浩志君 委員数4名 実行委員10名 委員会開催数5回(実行委員会3回を含む))

2009年12月11日の発表会に向けて第29回北海道建築作品発表会委員会が複数回開催された。4名が参加した北海道建築作品発表会委員会は2回開催され、今回の大きな方針や実行委員のメンバー構成を検討した。また、実行委員6名が加わった実行委員会は3回開催された。実行委員会は具体的なプログラムを検討する委員会である。具体的な作業としては、応募要項の作成、作品の受付、プログラム編成、作品のデータ集約などである。プログラム編成に関しては、今回の発表会の特徴として、フォーラムを加えることを検討した。過去の発表会ではフォーラムを企画してきたが、近年は会場や時間の制約があったこともあり見送られてきた。今回はその問題を克服すべく時間の配分を調整しながら、フォーラムを配置することを決定した。このフォーラムは、限られた時間ながらも活発な議論が生じ、ほぼ成功したように思う。入場者数も例年通り多く集まり、改めて建築作品発表会の重要性を再確認させられた。

当日は、第29回建築作品発表会作品集VOL-29を発刊した。また、発表会の内容について、北海道建築士事務所協会誌「ひろば」2009に実行委員の斉藤雅也氏が執筆した。あわせて日本建築学会「建築雑誌」2010/3月号に米田浩志が執筆した。

### (2) 北海道建築作品発表会の開催

#### 第29回建築作品発表会の報告

期日 2009年12月11日

会場 北海道立近代美術館講堂

発表作品数 30題

2009年12月11日に第29回北海道建築作品発表会が開催された。今年の発表作品総数は30作品であった。例年通り北海道近代美術館の講堂において行われ、建築学会会員含め学生たちも多く参加し盛況であった。今回の発表会の特徴は、第1部、2部の発表に加え、第3部にフォーラムを加えた。この各作品発表後のフォーラムは、かつて北海道建築作品発表会において重要な

プログラムであった。しかし、ここ数年の作品発表会ではフォーラムが凍結されてきた。その理由は、会場や時間の制約があったこともあるが、総括的な議論を進めていく上で各作品共通のプラットフォームが築けない建築を取り巻く批評環境の存在もあった。結果的に、ここ数年の作品発表会ではフォーラムが見送られ、あえて作品間を関係付けないフラットな作品発表の場になってきた。このような形式の作品発表会は、特に問題を有するものではなかったが、建築界の世代交代が徐々に進む中、各建築家や作品に対して積極的にコミットすることへの必要性を徐々に感じさせられて来るようになってきた。この積極的なコミットによって、共通了解とされてきたものに対する認識の相違の発見や、言外の作品の志向性を新たに発見することができると期待された。このような問題意識から、あらためてフォーラムが企画された。このフォーラムには4人の司会者(菊池規雄、斉藤雅也、山田深、米田浩志)が発表者とオーディエンスとの仲介者になり、有効に議論を展開していく上での介在的な役割を担った。具体的な進め方としては、オーディエンスからの質問票の受け付け、そしてその紹介から始まり、その後、第1部・第2部で発表された幾つかの作品を司会者が相互に関連付け共通するテーマを幾つか提示した。この提示されたテーマを中心に発表者と意見交換がなされ、単体の作品からだけでは得られない作品発表会全体としての立体的な広がりが得られた。今後も北海道建築作品発表会の場で刺激的な議論の発現を期待したい。

参加者約300名。「北海道建築作品発表会作品集2009 VOL.29」を発刊。

## 7. 特別委員会

### 7.1 事業主査連絡会(事業系5委員会の主査、事業系担当常議員、連絡会開催数1回)

本連絡会では、事業系5委員会の事業進捗状況と連携、その際の問題点等の把握、常議員会へ改善提案等の活動を行うこととしている。過去議題にあがった事項の対応として、本年度についても建築文化週間中に第34回の北海道建築賞表彰式と記念講演会が実施された。また、卒業設計審査委員会より出されていたHPへの入選作品の掲載については、HP管理委員会との連携し最新年度までが掲載されている。

### 7.2 総務委員会(委員長:菊地 優君 委員数4名 委員会開催数1回)

経理関連業務として初めに、北海道支部の会計基準を学会に新たに導入された新公益法人会計基準へ移行させる作業を行った。続いて、この新会計基準に基づき、支部の毎月の収入・支出内容についての確認、経理執行状況と予算との比較検討、全体の財務管理を行った。収支状況については、四半期に一度の頻度で、常議員会にて報告した。

日本建築家協会北海道支部との連携に関しては、合同委員会(1回)を開催して、両団体の活動に関する情報交換を行った。また、両団体の合同企画として、ジョイントセミナー(2回)を実施した。

### 7.3 ホームページ管理委員会(主査:谷口 尚弘君 委員数5名)

当委員会は、2001年4月に開設された当支部ホームページの管理を活動の目的とし、委員会の定例開催は特に設定していないが、掲載内容等について適宜通信により協議することとしている。今年度は、1名が任期により委員を改選した。

2007年1月より、新しいホームページ管理委員会規定に基づき活動しており、講演会の開催案内、北海道支部研究発表会や北海道建築作品発表会の募集案内等の掲載を行い、北海道支部の広報として活動した。また、各委員会におけるホームページの更新は少しずつではあるが更新がされた。しかし、未だ十分実施されていない委員会には、積極的に更新するようにあらためて要請しなければならない。

## 8. 講習会・シンポジウム等の開催

### 8.1 講習会

#### (1) 本部主催講習会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
2009 年度調査研究委員会事業 「寒中コンクリート施工指針」改定講習会	2010.2.3	ホテルノースシティ	濱 幸雄君 他 3 名	136 名
2009 年度支部共通事業「鉄筋コンクリート構造計算規準改定 X 形配筋部材設計施工指針」講習会	2010.3.4	ホテルノースシティ	後藤康明君 他 2 名	68 名

#### (2) 支部委員会主催講習会（セミナー）

該当なし

### 8.2 講演会

#### (1) 本部主催講演会

該当なし

#### (2) 支部主催講演会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
アーキニアリング・デザイン展 in 札幌 講演会 ・講演会 1「『空間と構造』—アーキニアリング・デザイン展を 10 倍楽しむ方法—」  ・講演会 2「建築の変革を促すエンジニアたち (Innovative Engineering in Architecture)」  ・講演会 3「『フォルムと構造デザイン』—モード学園スパイラルタワーズ的设计—」	2009.7.21 2009.7.22 2009.7.23	・札幌エルプラザ ・北海道大学工学部 建築都市スタジオ棟 内 MUTSUMI HALL ・北海道大学工学部 建築都市スタジオ棟 内 MUTSUMI HALL	斎藤公男君 彦根 茂君 山脇克彦君	274 名 73 名 61 名
建築文化週間「第 34 回北海道建築賞表彰式・記念講演会」	2009.10.30	北海道大学遠友学舎	西村 浩君	約 80 名
第 29 回北海道建築作品発表会	2009.12.11	北海道立近代美術館 大講堂	作品数 35 点	約 300 名

「北海道の建築作品を探るーその歴史、構造、そして強み」	2010.2.16	北海道室蘭工業高等学校	水野信太郎君	39名
「建築柔剛論争」	2010.3.18	北海道名寄産業高等学校	南出孝一君	31名

### (3) 支部委員会主催講演会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
「繪内正道先生北海道科学技術賞受賞記念講演会」 (環境工学専門委員会)	2009.6.15	京王プラザホテル札幌	繪内正道君	138名
建築文化週間「みんなで始める地震防災対策」 (都市防災専門委員会)	2009.10.3	中標津町総合文化会館	麻里哲広君 他5名	53名
第4回環境工学系・卒業論文発表会 EGGs08 (環境工学専門委員会)	2010.3.12	札幌市立大学サテライトキャンパス	発表題数 40題	80名

## 8.3 展示会

開催日	名 称	会 場	参加者数
2009.5.14 ～5.16 5.23～26 6.4～6.7 11.25～27	全国大学・高専卒業設計展示会	室蘭工業大学  東海大学 北海道大学 釧路工業高等専門学校	167名  374名 165名 150名
2009.7.13 ～11.30	道内工高卒業設計優秀作品巡回展	道内工高12校	
2009.7.19 ～25	「アーキニアリング・デザイン展 in 札幌」	北海道大学遠友学者	742名

## 8.4 見学会

開催日	見 学 場 所	解説者	参加者数	主 催
2009.4.21	「新千歳空港国際線ターミナルビル」見学会	現場担当者	40名	材料施工専門委員会 構造専門委員会
2009.9.4	「北海道大学大学院工学研究科共用実験棟」見学会	現場担当者	24名	材料施工専門委員会 構造専門委員会
2009.11.7	「住宅見学会 熊谷邸」	久野浩志君	12名	北方系住宅専門委員会

## 9 . 本部関連事業・その他

### 9 . 1 2009 年度支部共通事業設計競技の実施

#### ( 1 ) 共通事業設計競技審査委員会 ( 主査 : 川人 洋志君 委員数 5 名 委員会開催数 1 回 )

委員会活動として設計競技審査会を 2009 年 7 月 17 日、午後 4 時より日本建築学会北海道支部会議室に於いて、5 名の委員全員出席のもと開催した。本年度の設計課題は「アーバン・フィジックスの構想」であり、13 案の応募があった。5 名の委員全員による活発な討議を経て 4 案を支部入選案として決定した。

支部審査員 :

主 査 : 川人 洋志君

委 員 : 赤坂 真一郎君 小西 彦仁君 那須 聖君 山之内 裕一君

#### ( 2 ) 審査講評

設計競技審査会を 2009 年 7 月 17 日、午後 4 時より日本建築学会北海道支部会議室に於いて、5 名の委員全員出席のもと開催した。本年度の設計課題は「アーバン・フィジックスの構想」であり、13 案の応募があった。5 名の委員全員による活発な討議を経て 4 案を支部入選案として決定した。入選案 4 案のうち、1 案は道外からの応募であった。以下に支部入選 4 案の審査評を記す。

##### 「アーバン・フィジックスの構想」

南 瑛記・加藤千尋-北海道大学大学院工学研究科

昨今のカーボンオフセットがグローバルに考えられているように、日本全体あるいは世界規模でエコバランスをとる必要性は十分に考えられる。

北海道の林業の小さな町に計画された案である。かつては豊富にある自然林で林業が成り立っていたが、林業が衰退し人口減を招きその森は放置されている。それは新たな木材供給や保水性の低下など様々な弊害を生む、そこでその森の中の木や動物に影響を与えないようボロノイ分割により建築（住む場所）を挿入していくことにより、人と自然が互いにケアしながら生活をしていくことで森が生き結果的に都市とバランスされアーバン・フィジックスへとつながるという構想へ讃辞を送りたい。

( 文責 : 小西彦仁 )

##### 「つちなみ まちなみ ひとなみ」

相場奈津子・大川恵理子・増田祥子-北海道大学大学院工学研究科

この提案では、人工物や制度によって表層的に覆われ、分節されてしまった環境に対して、「つち」を中心とした手法によって連続性の再構築を試みている。町内会による維持監理が行われている遊歩道周辺を対象に、敷地に既存のコミュニティを前提し、土量バランスの確保、立体的な地面化・緑化、断面の工夫を通して、新たな環境としての「つちなみ」、その中で展開される「ひとなみ」、それらの生む「まちなみ」を構成している。提出作品全体にアーバン・フィジックスに対する形式的で半ば強引な提案が多かった中で、本案は工学的な検証こそないものの、既存の環境の形式をうまくミックスすることで、分節された人口環境相互の依存性・連続性に対する提言がある。

( 文責 : 那須 聖 )

##### 「環境美術館」

廣川慶一・砂川慶太-日本大学大学院生産工学研究科

明治 31 年、日露戦争時の津軽海峡防衛強化のために函館山に建設された函館要塞は、今もその姿を残している。「環境美術館」と題された、この作品は、要塞としての機能から切り離された場所に宿る、自然の地形のような“環境”としての可能性を見いだすことによって支えられている。大仰で切実さにかける、いわば質の高くない SF 的世界が多く見られた中で、比較的好感を持つ

た。

(文責：川人 洋志)

#### Ground DUTY

渡部典大・石黒 卓・千葉拓也-北海道大学大学院工学研究科

新しい建物ができるたびに建設発生土によってビルの谷間は土で満たされていく。都市を覆い尽くしていたアスファルト舗装は撤去され、谷間に降った雨は染み込み、他の谷間と繋がってゆく。都市と土の関係を取り戻そうとする提案。

非現実的な内容も多く含んだ作品ではあるが、他の作品に比べ美しいストーリーを持ち合わせ、土を媒体としたコミュニティの提案や土の長所を活かす技術提案など、モノのデザインから一歩踏み込もうとする努力の痕跡が感じられ好感が持てた。

(文責：赤坂真一郎)

### 9.2 作品選集支部選考の実施

#### (1) 作品選集支部選考部会活動報告(主査：植田 暁君 委員数 7 名 委員会開催数 2 回及び 現地審査)

審査員：主査：植田 暁君

委員：小澤 丈夫君、遠藤謙一良君、神田 憲治君、島田 友典君、平尾 稔幸君、  
本井 和彦君

#### (2) 作品選集支部選考の結果

支部応募作品数 10 点

支部選考通過作品数 5 点(本部採用 5 点)

作品選集掲載作品

- ・知床斜里複合駅舎  
川人 洋志君：川人建築設計事務所  
長谷川季雄君：日本交通技術(株)札幌支店
- ・糸魚小学校  
加藤 誠君：(株)アトリエブク  
金箱 温春君：金箱構造設計事務所  
鈴木 大隆君：北海道立北方建築総合研究所
- ・オレセン・ノイエ  
赤坂真一郎君：(株)アカサカシンイチロウアトリエ
- ・北海道大学弓道場  
保科 文紀君：合資会社 d. n. a  
菊池 規雄君：ワンダーアーキ建築事務所
- ・イコロの森  
鈴木 敏司君：(株)アトリエアク

### 9.3 建築文化週間

#### ①みんなで始める地震防災対策

主 催：日本建築学会北海道支部

共 催：北海道立北方建築総合研究所、厚真町

日 時：10月3日(土) 9:00~13:00

場 所：厚真町総合ケアセンター

プログラム：

- 1.地震と建物の耐震性の話(講師：麻里哲広)

- 2.住宅の耐震診断の話（講師：草苺敏夫）
- 3.室内の安全対策の話（講師：竹内慎一）
- 4.住宅の耐震診断と室内診断の体験（講師：戸松誠、竹内慎一）
- 5.避難食づくり（講師：南慎一）
- 6.非常持ち出し品（講師：西川美奈子）

参加対象：会員、町民、行政職員

参加者：53名

参加費：無料

②テーマ：第34回北海道建築賞（2009年度）表彰式及び記念講演会

第34回北海道建築賞（2009年度）を受賞された方に、受賞作品を語っていただきました。

主催：日本建築学会北海道支部

日時：2009.10.30（金）17:00～19:30

講師：西村 浩君（第34回北海道建築賞）「岩見沢複合駅舎」の設計

会場：北海道大学遠友学舎（札幌市北区北18条西7丁目）

参加者：約80名

## 10．建築関連団体との活動

### 10.1 AIJ-JIA 合同委員会（委員数(AIJ)：7名、開催数：1回）

本委員会では、AIJ, JIA 両団体の活動の活性化を目的として、合同の企画等に関わる事項について協議した。協議内容は、①AIJ-JIA ジョイントセミナーの企画、②大学院インターンシップ対応、③両団体のイベント紹介と参加要請についてである。AIJ-JIA ジョイントセミナーは、第15回として2009年8月18日に「住まいの内外の自然を<感じる・理解する・創造する>」講師：斉藤雅也君（札幌市立大学）、第16回として2009年12月4日に「未来に残したい歴史的建造物 ～地震から守るために～」講師：菊地優君（北海道大学）を開催した。

### 10.2 北海道建築設計会議（幹事会 9回）

本会議は、日本建築学会北海道支部、北海道建築設計事務所協会、日本建築家協会北海道支部、北海道建築士会、北海道まちづくり促進協会、北海道設備設計事務所協会、日本構造技術者協会北海道支部、日本建築積算協会北海道支部、建築設備技術者協会北海道支部及び北海道建築技術協会の10団体により構成されている。本会からは、原田慎一と加藤誠の2名を参加させた。幹事会においては、新しい建築確認制度等について情報交換や意見交換を行った。

11 . 共催・後援

期 日	名 称	会 場	主 催
2009.7.7	「低強度コンクリート研究委員会紹介」セミナー	かでの 2.7	(社)北海道建築技術者協会
2009.7.18	「函館まちづくりキャラバン～西部地区の地域マネジメント」	函館市地域交流まちづくりセンター	NPO 日本都市計画家協会北海道支部
2009.8.19 (応募締切)	第 33 回北の住まい住宅設計コンペ		(社)北海道建築設計事務所協会
2009.9.14	「コンクリートの日 in Hokkaido 出前講座 大学から実務者へ～」	ロワージルホテル函館	(社)日本日本コンクリート工学協会
2009.10.3	「平成 21 年度地震防災シンポジウム」	苫小牧市民文化会館	北海道
2009.10.3	札幌建築セミナー「A・レーモンドは何を残したか」	かでの 2.7	新建築家技術者集団北海道支部
2009.10.14	「JCI 北海道支部からの出前講座 大学から実務者へ～技術情報の発信と情報交換～」	ホテル札幌ガーデンパレス	(社)日本コンクリート工学協会北海道支部
2010.1.22	HoBEA フォーラム 2010「マンション改修と性能向上耐震と外断熱改修」	札幌エルプラザ	(社)北海道建築技術者協会
2010.2.9	「第 20 回旭川建築作品発表会」	上川倉庫リハーサルホール	旭川まちなみデザイン推進委員会
2010.2.10	「平成 21 年度地震防災セミナー」	函館市民会館小ホール	北海道
2009.2.11	シンポジウム「場としての茶室～お茶を楽しむ暮らしを考える」	紀伊国屋書店札幌本店	HAUS project 北海道建築都市プロジェクト
2010.2.22	「地区講演会(札幌) 持続可能建築と知的財産性」	札幌エルプラザ	(社) 空気調和・衛生工学会
2010.3.4	「すべての建築士のための特別総合研修」	札幌市民ホール	(社)北海道建築士会

## 2009 年度収支決算報告

## 2009 年度 貸借対照表

(単位:円)

科目名称		当年度	前年度	増減
資産の部	1 流動資産			
	現金預金	1,786,879	1,449,607	337,272
	未収金	0	0	0
	前払金	176,319	174,719	1,600
	仮払金	6,979	12,787	5,808
	流動資産合計	1,970,177	1,637,113	333,064
	2 固定資産			
	(1) 基本財産	0	0	0
	基本財産合計	0	0	0
	(2) 特定資産			
	学術振興基金引当資産	3,460,000	3,600,000	140,000
	災害調査研究基金引当資産	2,200,000	2,200,000	0
	支部基金引当資産	3,110,000	3,110,000	0
	退職給付引当資産	540,000	480,000	60,000
	特定資産合計	9,310,000	9,390,000	80,000
	(3) その他の固定資産			
	敷金	561,550	561,550	0
その他の固定資産合計	561,550	561,550	0	
固定資産合計	9,871,550	9,951,550	80,000	
<b>資産の部合計</b>	<b>11,841,727</b>	<b>11,588,663</b>	<b>253,064</b>	
負債の部	1 流動負債			
	未払金	0	0	0
	前受金	18,000	18,000	0
	預り金	23,537	9,675	13,862
	仮受金	561,550	561,550	0
	賞与引当金	0	0	0
	流動負債合計	603,087	589,225	13,862
	2 固定負債			
	退職給付引当金	540,000	480,000	60,000
	固定負債合計	540,000	480,000	60,000
<b>負債の部合計</b>	<b>1,143,087</b>	<b>1,069,225</b>	<b>73,862</b>	
正味財産の部	1 指定正味財産			
	指定正味財産合計	0	0	0
	(うち基本財産への充当額)	(0)	(0)	(0)
	(うち特定資産への充当額)	(0)	(0)	(0)
	2 一般正味財産	10,698,640	10,519,438	179,202
	(うち基本財産への充当額)	(0)	(0)	(0)
	(うち特定資産への充当額)	(8,770,000)	(8,910,000)	( 140,000)
<b>正味財産合計</b>	<b>10,698,640</b>	<b>10,519,438</b>	<b>179,202</b>	
<b>負債及び正味財産合計</b>	<b>11,841,727</b>	<b>11,588,663</b>	<b>253,064</b>	

2009年度 正味財産増減計算書

北海道支部

(単位:円)

科目名称	当年度	前年度	増減	科目名称	当年度	前年度	増減
一般正味財産増減の部							
1 経常増減の部							
[1] 経常収益				[2] 経常費用			
(1) 特定資産運用益	( 40,457 )	( 31,565 )	( 8,892 )	(1) 事業費	( 4,095,133 )	( 3,918,308 )	( 176,825 )
特定資産受取利息	40,457	31,565	8,892	研究集会事業費	( 2,108,653 )	( 2,272,319 )	( 163,666 )
(2) 事業収益	( 2,620,453 )	( 2,699,840 )	( 79,387 )	研究集会事業費	2,108,653	2,272,319	163,666
研究集会事業収益	( 2,225,453 )	( 2,494,840 )	( 269,387 )	講演会・展示会費	( 482,261 )	( 416,201 )	( 66,060 )
研究集会事業収益	2,225,453	2,494,840	269,387	講演会事業費	459,592	382,851	76,741
講演会事業収益	190,000	0	190,000	展示会事業費	22,669	33,350	10,681
受託事業収益	0	0	0	調査研究事業費	911,995	593,431	318,564
その他の事業収益	205,000	205,000	0	表彰・顕彰事業費	( 592,224 )	( 636,357 )	( 44,133 )
(3) 受取寄付金	0	0	0	表彰関係費	576,794	622,622	45,828
受取基金寄付金	0	0	0	設計競技費	15,430	13,735	1,695
(4) 雑収益	( 365,353 )	( 313,154 )	( 52,199 )	委託事業費	0	0	0
雑収益	( 365,353 )	( 313,154 )	( 52,199 )	(2) 管理費	( 5,735,928 )	( 5,638,010 )	( 97,918 )
受取利息	1,132	3,353	2,221	会議費	( 209,070 )	( 252,970 )	( 43,900 )
その他の雑収益	364,221	309,801	54,420	総会費	190,790	191,290	500
(5) 他会計からの繰入額	( 6,984,000 )	( 6,892,000 )	( 92,000 )	役員会費	18,280	42,280	24,000
基本部門からの繰入額	( 5,126,000 )	( 5,034,000 )	( 92,000 )	運営費	0	19,400	19,400
支部費	1,522,000	1,526,000	4,000	給与手当	1,817,828	1,807,964	9,864
経営助成費	2,010,000	2,160,000	150,000	福利厚生費	284,833	277,855	6,978
事業促進費	550,000	300,000	250,000	退職給付費用	60,000	60,000	0
支部研究補助費	200,000	200,000	0	通信費	146,628	152,233	5,605
教育文化事業交付金	544,000	548,000	4,000	印刷費	102,412	52,466	49,946
大会交付金収入	0	0	0	消耗品費	89,053	59,009	30,044
支部事務費	300,000	300,000	0	電算費	0	0	0
会館部門からの繰入額	( 1,858,000 )	( 1,858,000 )	( 0 )	雑費	541,393	488,628	52,765
支部事務所費	1,858,000	1,858,000	0	事務所費	2,484,711	2,486,885	2,174
経常収益計	10,010,263	9,936,559	73,704	経常費用計	9,831,061	9,556,318	274,743
当期経常増減額	179,202	380,241	201,039				
2 経常外増減の部							
[1] 経常外収益				[2] 経常外費用			
経常外収益計	0	0	0	経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0				
当期一般正味財産増減額	179,202	380,241	201,039				
一般正味財産期首残高	10,519,438	10,139,197	380,241				
一般正味財産期末残高	10,698,640	10,519,438	179,202				
指定正味財産増減の部							
(1) 一般正味財産への振替額	( 0 )	( 0 )	( 0 )				
一般正味財産への振替額	0	0	0				
当期指定正味財産増減額	0	0	0				
指定正味財産期首残高	0	0	0				
指定正味財産期末残高	0	0	0				
正味財産期末残高	10,698,640	10,519,438	179,202				

2009 年度 収支計算書

北海道支部

(単位:円)

科目名称	予算額	決算額	差異	科目名称	予算額	決算額	差異
<b>事業活動収支の部</b>				<b>事業活動収支の部</b>			
1 事業活動収入				2 事業活動支出			
(1) 特定資産運用収入	( 16,000 )	( 40,457 )	( 24,457 )	(1) 事業費支出	( 4,490,000 )	( 4,095,133 )	( 394,867 )
特定資産利息収入	16,000	40,457	24,457	研究集会事業費支出	( 2,250,000 )	( 2,108,653 )	( 141,347 )
(2) 事業収入	( 2,400,000 )	( 2,620,453 )	( 220,453 )	研究集会事業費支出	2,250,000	2,108,653	141,347
研究集会事業収入	( 2,200,000 )	( 2,225,453 )	( 25,453 )	講演会・展示会費支出	( 490,000 )	( 482,261 )	( 7,739 )
研究集会事業収入	2,200,000	2,225,453	25,453	講演会事業費支出	460,000	459,592	408
講演会事業収入	0	190,000	190,000	展示会事業費支出	30,000	22,669	7,331
受託事業収入	0	0	0	調査研究事業費支出	990,000	911,995	78,005
その他の事業収入	200,000	205,000	5,000	表彰・顕彰事業費支出	( 760,000 )	( 592,224 )	( 167,776 )
(3) 寄付金収入	( 0 )	( 0 )	( 0 )	表彰関係費支出	720,000	576,794	143,206
基金寄付金収入	0	0	0	設計競技費支出	40,000	15,430	24,570
(4) 雑収入	( 254,000 )	( 365,353 )	( 111,353 )	委託事業費支出	0	0	0
雑収入	( 254,000 )	( 365,353 )	( 111,353 )	(2) 管理費支出	( 5,770,000 )	( 5,675,928 )	( 94,072 )
利息収入	4,000	1,132	2,868	会議費支出	( 270,000 )	( 209,070 )	( 60,930 )
その他の雑収入	250,000	364,221	114,221	総会費支出	200,000	190,790	9,210
(5) 他会計からの繰入金収入	( 7,017,000 )	( 6,984,000 )	( 33,000 )	役員会費支出	60,000	18,280	41,720
基本部門からの繰入金収入	( 5,159,000 )	( 5,126,000 )	( 33,000 )	運営費支出	10,000	0	10,000
支部費収入	1,409,000	1,522,000	113,000	給与手当支出	1,750,000	1,817,828	67,828
経営助成費収入	2,160,000	2,010,000	150,000	福利厚生費支出	300,000	284,833	15,167
事業促進費収入	550,000	550,000	0	退職給付支出	0	0	0
支部研究補助費収入	200,000	200,000	0	通信費支出	212,000	146,628	65,372
教育文化事業交付金収入	540,000	544,000	4,000	印刷費支出	50,000	102,412	52,412
支部事務費収入	300,000	300,000	0	消耗品費支出	90,000	89,053	947
会館部門からの繰入金収入	( 1,858,000 )	( 1,858,000 )	( 0 )	電算費支出	0	0	0
支部事務所費収入	1,858,000	1,858,000	0	雑費支出	445,000	541,393	96,393
				事務所費支出	2,653,000	2,484,711	168,289
<b>事業活動収入計</b>	<b>9,687,000</b>	<b>10,010,263</b>	<b>323,263</b>	<b>事業活動支出計</b>	<b>10,260,000</b>	<b>9,771,061</b>	<b>488,939</b>
投資活動収支の部				投資活動収支の部			
1 投資活動収入				2 投資活動支出			
(1) 特定資産取崩収入	( 290,000 )	( 190,000 )	( 100,000 )	(1) 特定資産取得支出	( 60,000 )	( 110,000 )	( 50,000 )
特定資産取崩収入	( 290,000 )	( 190,000 )	( 100,000 )	特定資産取得支出	( 60,000 )	( 110,000 )	( 50,000 )
学術振興基金引当資産取崩収入	290,000	190,000	100,000	学術振興基金引当資産取得支出	0	50,000	50,000
支部基金引当資産取崩収入	0	0	0	支部基金引当資産取崩支出	0	0	0
退職給付引当資産取得収入	0	0	0	退職給付引当資産取得支出	60,000	60,000	0
<b>投資活動収入計</b>	<b>290,000</b>	<b>190,000</b>	<b>100,000</b>	<b>投資活動支出計</b>	<b>60,000</b>	<b>110,000</b>	<b>50,000</b>
財務活動収支の部				財務活動収支の部			
1 財務活動収入				2 財務活動支出			
<b>財務活動収入計</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>財務活動支出計</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
				予備費支出	202,000	0	202,000
<b>収入合計 ~</b>	<b>9,977,000</b>	<b>10,200,263</b>	<b>223,263</b>	<b>支出合計 ~</b>	<b>10,522,000</b>	<b>9,881,061</b>	<b>438,939</b>
<b>当期収支差額</b>	<b>545,000</b>	<b>319,202</b>	<b>864,202</b>				
<b>前期繰越収支差額</b>	<b>1,000,000</b>	<b>1,047,888</b>	<b>47,888</b>				
<b>次期繰越収支差額</b>	<b>455,000</b>	<b>1,367,090</b>	<b>912,090</b>				

## 監査報告

2009年度における社団法人日本建築学会北海道支部の業務及び経理を監査の結果、業務は適法であり、収入支出とも適正なものと認める。

2010年4月22日

支部監事 \_\_\_\_\_

支部監事 \_\_\_\_\_

## 2010 年度事業計画方針案

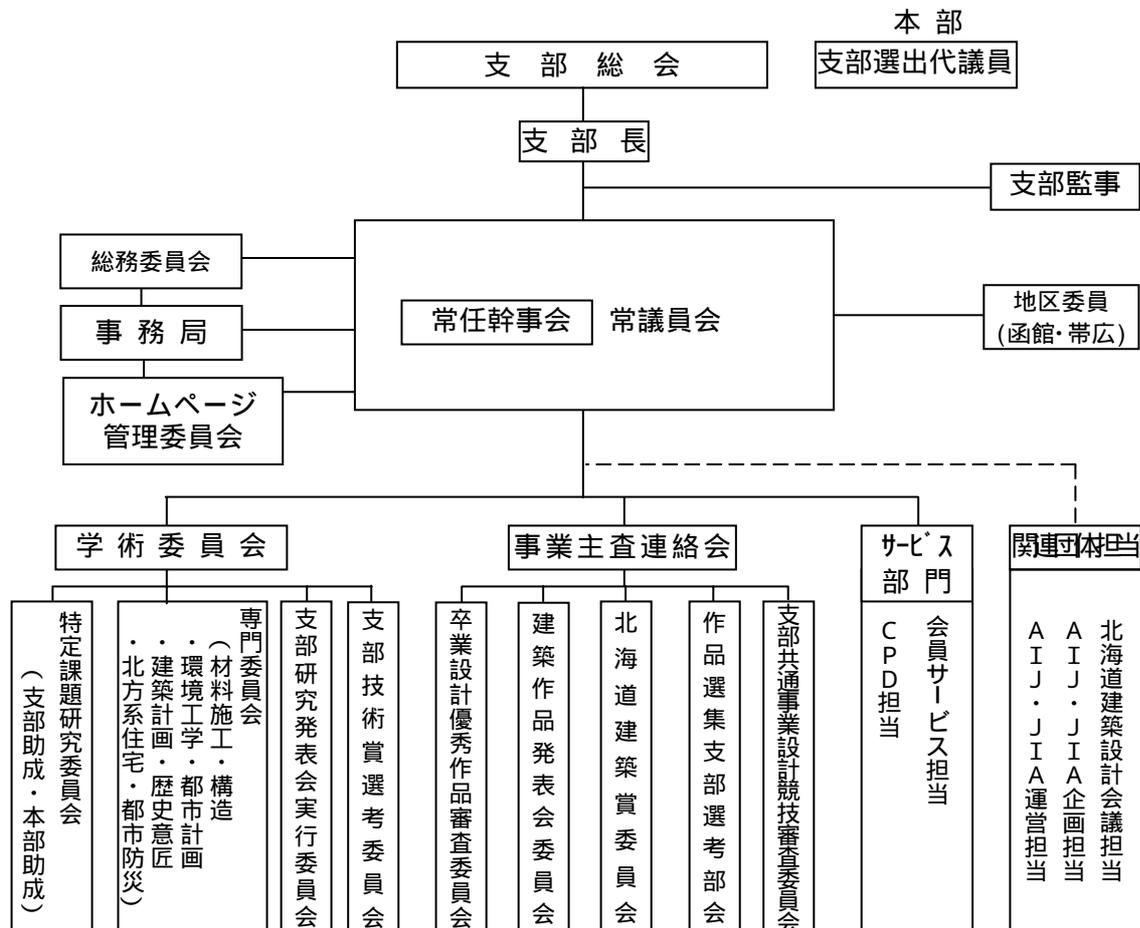
### 1. 活動方針

学会本部の法人化改革に伴い、支部会計、支部規定などの大幅な改革が予定されている。基本的には従来の各支部の活動実績を是認する形で、本部で整合性を図ってくれると思われる。このようなことを考えると 2010 年度は将来への布石のためにも更なる活発な活動が期待される。

支部活動の中で最も重要な各専門委員会の活動を活発にすること及び特定課題研究の活性化をはかる必要がある。支部技術賞は創設して 4 年目を迎えるが、さらに応募しやすくするために規定上の細部を検討することが必要であろう。

本部では 3 年前の大会から「建築デザイン発表会」を開催して建築デザイン分野に発表のしやすい機会を提供し発表数の増加に寄与してきた。支部でも何らかの方策を検討する必要がある。また、建築士法の改正に伴い大学院教育と設計事務所及び建設業との連携が至る所で必要となってきた。北海道建築設計会議および AIJ-JIA 合同委員会へ期待するところが大きい。

### 2. 2010 年度執行体制



日本建築学会北海道支部組織構成図

支部長(2010.6.1~2012.5.31)

角 幸博君 北海道大学教授

新任常議員(2010.6.1~2012.5.31)

稲川 努君 (株)石本建築事務所札幌支所主事  
※岡本 浩一君 北海学園大学准教授  
関 義弘君 (株)北海道日建設計構造設計室室長  
真境名達哉君 室蘭工業大学講師  
※本井 和彦君 (株)竹中工務店北海道支店設計部設計課長  
山本 悦徳君 北海道札幌工業高等学校教諭  
横山 和俊君 大成建設(株)札幌支店作業所長  
(※印 常任幹事)

支部長及び新任常議員は、支部役員選挙開票(2010年4月6日)により決定した。  
支部役員選挙管理委員は次の通りであった。(☆印 委員長)

☆森 傑君 菊地 優君 谷口 尚弘君 那須 聖君 深瀬 孝之君

留任常議員(2009.6.1~2011.5.31)

大柳 佳紀君 北海道立総合研究機構本部連携推進部主幹  
※谷口 尚弘君 北海道工業大学准教授  
那須 聖君 札幌市立大学講師  
原田 慎一君 清水建設(株)技術ソリューション本部  
環境・エネルギーソリューション部主査  
深瀬 孝之君 伊藤組土建(株)建築部技術課課長  
松村 博文君 北海道立総合研究機構建築研究本部北方建築総合研究所  
居住科学部都市生活科科长  
※森 傑君 北海道大学准教授  
(※印 常任幹事)

新任代議員 (2010.4.1~2012.3.31)

駒木 定正君 北海道職業能力開発大学校准教授  
福島 明君 北海道立総合研究機構建築研究本部  
北方建築総合研究所企画調整部部长  
南出 孝一君 南出建築技術史研究所所長  
(2009年3月の本部選挙の結果、上記3名が選出された)

留任代議員 (2009.4.1~2011.3.31)

絵内 正道君 北海道大学名誉教授  
佐藤 孝君 北海道工業大学教授  
平尾 稔幸君 平尾建築事務所代表

新任支部監事 (2010.6.1~2012.5.31)

串山 繁君 北海学園大学教授  
(2010年4月の支部常議員会で選出された)

留任支部監事 (2009.6.1~2011.5.31)

飯田 雅史君 北海道工業大学教授

地区委員 (2010.6.1~2011.5.31)

帯広地区委員 小野寺 一彦君 設計工房アーバンハウス主宰  
函館地区委員 山本 真也君 函館市都市建設部長

### 3. 支部運営の諸会合の開催

#### 総会

期日 2010年5月13日(木)  
会場 北海道第二水産ビル

常議員会 (複数回)

常任幹事会 (複数回)

選挙管理委員会 (支部役員選挙時に開催する)

### 4. 学術系委員会

#### 4.1 学術委員会 (主査：緑川 光正君 委員数 15名、委員会開催予定数4回)

本委員会は、本部学術推進委員会の情報を各専門委員会および研究委員会に報告するとともに、各専門委員会・研究委員会から企画及び活動の報告を受け、各委員会の活動の横断的な連携をはかる。また、支部長諮問事項についての検討、支部研究発表会実行委員会の企画の審議と承認、特定課題研究、支部助成研究、建築文化週間事業の募集と選考、特色ある支部活動企画の申請および北海道支部技術賞の選考をおこなう。

#### 4.2 専門委員会

##### 材料施工専門委員会 (主査：桂 修君 委員数 22名、委員会開催予定数6回)

建築の材料・施工に関する情報や意見の交換のほか、支部長から諮問される事項の検討、本部との情報交流や諮問事項の検討、最新の施行現場や特色のある建築物や工事現場の見学会、本部主催講習会への協力や北海道に関連する材料施工部門の研究委員会活動を行う。

具体的な活動予定は以下のとおりである。

- ・ 本部および支部各種委員会報告と諮問事項の審議
- ・ 勉強会 (話題提供)
- ・ 見学会の開催
- ・ 道内巡回講演会
- ・ 寒中施工に関する講演会開催 (道内3カ所程度を予定)

##### 構造専門委員会 (主査：田沼 吉伸君 委員数 21名 + 木下 一 名 委員会開催予定数2回)

これまでに引き続き、委員会を通して道内における構造関係の研究者・技術者との情報交換を行うと共に、各種行事を企画して地域の会員・市民への啓蒙活動を行う。主な活動予定は次のとおりである。

- 1) 委員会の開催：2回行う (6月, 12月)。必要に応じて通信会議を開く。
- 2) 講演会・講習会：建築関連諸団体と協力して必要に応じて計画する。
- 3) 施工現場見学会：道内で現在施工中の建築物等の見学会を行う。
- 4) 工業高校巡回講演会

講師：長谷川圭一委員 演題：「力の流れを設計する (カテナリーアーチ イスラーとガウディを例に)」、 「受け継がれる建築の技術」

- 5) 勉強会：委員会開催時に、幅広い分野を対象に適宜勉強会を行う。

##### 環境工学専門委員会 (主査：羽山 広文君 委員数 28名 委員会開催予定数4回)

本委員会は以下の活動を計画している。

- 1) 第5回環境工学系・卒業論文発表会 EGGs10 を開催する。

- 2) 高齢化社会に対応する生活環境整備の課題検討及び取り組みを実施するに当たり、特定課題研究「住環境の変化が身体へ与える影響の実態把握」の実施をサポートする。
- 3) (社) 空気調和・衛生工学会および(社) 北海道建築技術協会、日本マンション学会などと連携し、環境関連の講演・シンポジウムへの後援・協賛等を予定している。

**建築計画専門委員会 (主査：門谷 眞一郎君 委員数 15名、委員会開催予定数 4回)**

2007-2009年度に引き続き、「超高齢化社会の積雪寒冷地における居住環境整備の課題」を2010年度の活動テーマに研究協議を図る。「安全・安心」で「快適」を標榜する立場から、居住施設とその周辺の住環境に連続する行動空間を確保するための計画的な方法論を継続して考究して行く。2010年度は、グループホームとその周辺の環境整備に論点を絞り、行動空間としての性能評価の仕方について、事例調査を通じて検討する。2009年度積み残しの事例、認知症対応グループホーム「しづく」(登別市)の見学会は、勉強会を兼ねて春季に実施の計画をした。なお、更に数例の事例見学を検討するものとしている。また、委員会活動のためのポータルサイトは、改めて強化を図って行く予定。

**都市計画専門委員会 (主査：小林 英嗣君 委員数 12名、委員会開催予定数 3回)**

都市計画専門委員会では、(1)都市計画・まちづくりに関わる人材の育成と、(2)産官学の横断的な情報交流の場づくりを重点課題とし、それに繋がる活動を展開する。

加えて、今後の都市に求められる低炭素型の都市システムや戦略的まちづくり手法などについても議論を深める【於 各委員会(3回)】。

都市計画・まちづくり実務者(行政、民間)と学生・若手社会人、教育研究者の相互交流を図る場としての企画【名称(仮)：プロと話そう(2回)】を予定している。また、臨床事例として相応しい自治体を選定し、前述の相互交流を含む現場での企画【企画名称：まちづくりルックイン+(仮)座・論(1回)】の実施を予定している。現在を含め将来的に重要となる切口(低炭素社会、地域マネジメント、住民主体、都市計画マスタープラン、整開保など)に着目するものである。事例を通じて、横断的な議論を目指す。

**歴史意匠専門委員会 (主査：中渡 憲彦君 委員数 17名、委員会開催予定数 5回)**

例年のおお、道内各地域の歴史的建造物の現状を把握することに努め、保存・活用等に関して委員相互の情報交換を行い、必要に応じて学会として社会や住民に貢献できる体制を準備する。2010年度は特色ある支部活動に採択された「北海道における漁業関連施設の歴史的研究」を委員会の委員を中心に行う。また、市民への啓発・普及活動として建築文化週間中の10月9日に「建築散歩～厚岸編」と題する建築見学会を実施する。また、委員会内部の活性化も考慮した研究交流や情報交換などを委員会の中で実施する。

**北方系住宅専門委員会 (主査：鈴木 大隆君 委員数 16名、委員会開催予定数 複数回)**

環境や高齢化問題を背景とした持続循環型社会における今後の住まいづくりに向けて、これまでの技術の集積からなる住宅づくりや居住者の一面的視点に立ったものづくりとは異なる新たなコンセプトの構築が求められる。2010年度も引き続き

- ・住宅分野で研究活動を精力的に進めている研究者
  - ・地域をベースに活動している建築家
  - ・積雪寒冷地に適する住宅を追求している生産者
  - ・地域をベースに事業展開している建材メーカー
- などを核としながら、年数回の委員会活動により地域・ひとネットと新たな住宅ビジョンの構築に向けた検討とシンポジウム等による社会活動を行う。

**都市防災専門委員会 (主査：草苅 敏夫君 委員数 19名、委員会開催予定数 2回、通信委員会複数回)**

委員相互の連携、防災関係機関との連携、他学協会との連携、地域との連携を強化するとともに、次の世代を担う若い人を育てていくための「防災教育の充実」を検討していくことも視野に

入れながら、次の3点を重点に活動を行う。

1) 建築文化週間事業「地震防災体験学習」の企画・運営。

建築文化週間事業として実施するようになって3年目にあたるが、地域の防災関係機関や地域住民との連携を深める意味で、重要な事業であると考え。2010年度は、渡島檜山管内での実施を企画している。

2) 構造専門委員会との共催による見学会、講習会の実施。

防災関連施設に関して、見学会および防災の見地と構造的見地から議論できる講習会等を実施する。

3) 災害時の北海道支部緊急連絡体制の整備と充実。

災害時の北海道支部緊急連絡体系が出来上がったが、運用できる体制にさらに充実させていく。

#### 4.3 特定課題研究委員会

(2009年度より)

冬季の津波避難対策研究委員会(主査:南 慎一君 委員数:5名、委員会開催予定数複数回)

冬季の津波避難事例についての調査を行い、避難対策及び避難施設利用に関する実態を把握する。また、津波避難施設の整備計画に関するケーススタディを行う。これらの結果を基に冬季の津波避難対策の課題を整理する。

#### 4.4 本部からの支部助成金による研究委員会

(2009年度より)

住環境影響の実態把握委員会(主査:羽山 広文君 委員数:6名、委員会開催予定数4回)

住宅における死亡は全体の約12%を占め、その数は冬期に顕著となっている。特に浴室での入浴死は年間1万人を越すと推定され交通事故死をも上回るが、その対策は遅れている。住居内の温熱環境の確保は居住者の健康を考える上で重要であるが、居住内の温熱環境の基準は示されていない。本研究では、昨年度に引き続き、室内の温熱環境が身体へ与える影響について、夕張医療センターの在宅診療、在宅介護利用者などを対象に、日常生活における室内の温熱環境と生理データを同時に計測し、住居内の温熱環境が身体へ与える影響を把握し、高齢者を対象とした住居内の温熱環境の基準策定の基礎データを得ることを目的とする。

#### 4.5 特色ある支部活動

北海道における漁業関連建築の歴史的研究WG(担当委員会:歴史意匠専門委員会)

(主査:駒木 定正君 委員数 17名)

今日の北海道発展の嚆矢は江戸期の漁業がもたらし、また獲れたニシンは漁肥として遠く関西や四国に出荷されて綿、藍、養蚕の桑などの生産に使われ、わが国近代化の一端を支えた。北海道の漁業に関わる建築の歴史的研究はわが国の近代化遺産の研究としても重要であることから、ここに特色ある北海道支部の研究活動として申請する。

#### 5. 支部研究発表会

##### 5.1 支部研究発表会実行委員会(主査:瀬戸口 剛君 実行委員会委員16名、委員会開催予定回数:4回)

支部研究発表会実行委員会は支部研究発表会の企画・運営を目的とし、下記を実施する。

1) 支部研究発表会の日程と会場の決定

- 2) 支部研究発表会の論文原稿種別、発表形式の決定
- 3) 論文執筆要領の作成と論文原稿の募集
- 4) 会長講演会および特別企画の実施
- 5) 論文原稿の受付および編集作業の実施、研究発表会プログラムの作成
- 6) 支部研究報告集（冊子および CD-ROM）の作成および発行
- 7) 支部研究発表会の実施

## 5.2 支部研究発表会の実施

第 83 回北海道支部研究発表会

日時：2010 年 7 月 3 日（土）9:30～17:00 一般研究発表会、会長講演会・特別企画

場所：室蘭工業大学

懇親会：講演会終了後にホテルサンルート室蘭で開催

原稿提出締切：2010 年 4 月 15 日（木）17:00（電子投稿受付）

発表登録システム HP：[http://olive-sg.eng.hokudai.ac.jp/aij/entry/thesis\\_entry.php](http://olive-sg.eng.hokudai.ac.jp/aij/entry/thesis_entry.php)

支部研究報告集（冊子および CD-ROM）No.83 を発行

## 6.表彰

### 6.1 北海道建築賞

#### （1）賞の概要

建築作品を支える「先進性」、「規範性」、「洗練度」の 3 つの視点から現地視察、議論を通して選考し、北海道建築賞の表彰および受賞者による記念講演を行い、北海道における建築創作活動の一層の促進を図る。

#### （2）北海道建築賞委員会の実施

上記の方針に基づき、以下のスケジュールによって委員会を実施する。

- 1) 第 35 回北海道建築賞の応募期間：2010 年 4 月 15 日（木）～5 月 17 日（月）
- 2) 審査期間：5 月上旬（応募状況確認および応募推薦作品の選定）～6 月中旬（書類審査）～7・8 月（現地審査）～9 月上旬（最終選考）
- 3) 結果発表：9 月下旬（常議員会での承認後）
- 4) 北海道建築賞表彰式および受賞記念講演会：10 月 29 日（金）予定

### 6.2 卒業設計優秀作品（日本建築学会北海道支部賞）

#### （1）賞の概要

大学・短大・高専・専門学校・工高の卒業設計優秀作品の表彰を行い、北海道地域の文化、建築教育の向上を図る。

#### （2）卒業設計優秀作品審査委員会の実施

2010 年度卒業設計優秀作品審査委員会においては、2009 年度と同様、2010 年度卒業設計作品について優秀作品審査委員会を実施し、「大学」「短大・高専・専門学校」「工業高校」の部門別に、各部門、金、銀、銅、各賞を選出する。

また、講評の論点を確認し、各選考作品の講評を行う。

### 6.3 卒業優秀学生・生徒（日本建築学会北海道支部賞）

大学・短大・高専・工高の優秀学生・生徒の表彰を行い、北海道地域の文化、建築教育の向上を図る。

### 6.4 日本建築学会北海道支部功労賞

当支部の維持・発展にとって功績・功労のあった支部に所属する会員、または所属した会員に対して、支部としての感謝の意を表するとともに、支部活動の活性化と意識の高揚を図ることを目的とし、表彰を実施する。

### 6.5 日本建築学会北海道支部技術賞

北海道支部技術賞は、地域性に係って、創造性豊かな建築・都市に関する新技術を表彰することにより、北海道における建築界の技術の向上に資することを目的とし、表彰を実施する。

## 7. 北海道建築作品発表会

### 7.1 北海道建築作品発表会委員会（主査：米田 浩志君 委員 4 名 実行委員 10 名 委員会開催数 5 回（実行委員会 3 回を含む））

2010 年度は建築作品発表会が第 30 回を迎える節目である。昨年に引き続き充実した発表の場にした。前年度に企画したフォーラムを改良しながら、さらに活発な議論が生じるようプログラムを検討して行きたい。建築作品発表会の 30 年は北海道建築の質の向上に積極的に寄与してきた。その事実を再確認しながら、今後の発表会への橋渡しをすべく 30 周年の特別企画を検討して行きたい。具体的には、建築作品発表会作品集を特別に編集し 30 周年記念誌として発刊する予定である。

### 7.2 北海道建築作品発表会の実施予定

作品の応募時期：8 月下旬～9 月下旬  
作品集原稿締め切り：10 月中旬  
作品発表会開催時期：12 月初旬の中の 1 日間  
作品発表会開催場所：道立近代美術館講堂（予定）

## 8. 特別委員会

### 8.1 事業主査連絡会（事業系 5 委員会の主査、事業主査連絡会担当常議員 予定開催数：複数回）

事業系 5 委員会の事業進捗状況とその際の問題点等を適宜把握し、意思決定機関である常議員会へ改善提案等を行っていくための役割を今後も果たして行くような活動を行っていく。さらには、各事業が連携しつつ活性化が計れる可能性を検討する。

### 8.2 総務委員会（委員長：菊地 優君 委員数 4 名 予定開催数 1 回）

本委員会の目的である北海道支部事務局運営の健全性を維持するために、適宜委員会を開催し

財務管理・事務局業務管理について検討する。昨今の経済状況により支部の財政状況がさらに悪化していることから、各事業に対して早めの詳細予算策定および事業終了後の決算報告についての提出を厳格にして、見通しのある財務管理を進める予定である。さらに、事務局業務の効率化、日本建築家協会北海道支部との合同企画についても検討を行う。

総務委員会(2010年度)(予定)

委員長	菊地 優 君	北海道大学	(教育機関の常議員経験者)
委員	那須 豊治 君	岩田地崎建設	(民間機関の常議員経験者)
〃	福島 明 君	北海道立総合研究機構	(行政機関の常議員経験者)
〃	松村 博文 君	北海道立総合研究機構	(留任常議員)
〃	未 定		(新任常議員)

### 8.3 ホームページ管理委員会(主査:谷口 尚弘君 委員数:5名)

当委員会は当支部ホームページの管理を活動の目的としている。5名の委員で構成され、委員会の定例開催は特に設定していないが、掲載内容等について適宜通信により協議することとしている。2010年度は、前年度に引き続き既掲載内容や行事案内等を迅速に更新・掲載し、時宜を得た会員への情報提供を行うとともに、会員外に対しても広く日本建築学会および当支部の活動を宣伝するため、各種委員会の活動状況、行事の案内および活動報告などを適切に掲載し、当ホームページの更なる充実を図る。

## 9. 講習会・シンポジウム等の開催

本部主催による講習会・講演会のほか、地域の要請にこたえる各種の講演・講習会を、工業高校・自治体及び関連諸団体等の協力を得て複数の地域で企画実施する。

### 9.1 本部主催講習会

2010年度本部主催支部共通事業講習会を開催する。

### 9.2 講演会

各専門委員会等の主催により、自治体、関係諸団体等の協力を得て企画実施する。

### 9.3 展示会

支部卒業設計優秀作品を学会支部ホームページにて公開する。また、全国大学・高専卒業設計優秀作品巡回展ならびに道内工高卒業設計優秀作品巡回展を実施する。

### 9.4 見学会

各専門委員会等の主催により、自治体、関係諸団体等の協力を得て企画実施する。

## 10. 本部関連事業・その他

### 10.1 2010年度支部共通事業設計競技の実施(主査:川人 洋志君 委員数5名 委員会開催予定数1回)

2010年度設計競技審査委員会の委員には、主査川人洋志、委員、赤坂真一郎、小西彦仁、那須聖、山之内裕一の5名で行う予定である。

2010年度の課題は「大きな自然に呼応する建築」と決定され、7月中に支部審査を1回行う予定である。なお、昨年以上の応募数確保のため、各大学関係者に参加の呼びかけを適切な時期に行いたいと考えている。

## 10.2 作品選集支部選考部会（主査：植田 暁君 委員数7名 委員会開催予定数2回及び現地審査）

この数年間に渡り、北海道支部から推薦した作品の多くが、作品選集に掲載された。北海道の建築作品が安定した質を、応募者が明快な論点を有している故と考えられる。これらの成果を引き続き、全国に伝えていきたい。2009年度の委員会の議論において、「より幅広い建築の可能性を見いだすため、若い応募者に期待したい」といった意見も委員会で共有された。

そのため、2010年度には次の視点を意識して、活動に取り組みたい。

- ・ より多くの作品が応募されるような環境づくりを、引き続き支部委員会で検討する。
  - ・ 現地審査において、1人でも多くの委員の参加を計り、闊達な議論の場を設ける。
  - ・ 選評執筆に際し、応募作品に対する議論の全体像を伝える、意識の共有化を計る。
- 2009年度支部推薦作品は、幅広い性格を有していた。北海道の環境や風景、産業に向き合った、応募者一人ひとりの取り組みの到達点とも読み取れる。2010年度の活動でも引き続き、新しい可能性の発見を見据えた選考を行いたい。

## 10.3 建築文化週間

グループセミナーなどを通して地域との研究交流を深め、また建築文化週間などの文化事業を通じて、開かれた学会として社会に対する文化活動の推進を図る。本年度予定している文化関連事業は、以下の3件を予定している。

1. 「みんなで始める地震防災対策」 (都市防災専門委員会)
2. 「第35回北海道建築賞表彰式・記念講演会」 (支部主催)
3. 歴史的建造物の見学「建築散歩～厚岸編」 (歴史意匠専門委員会)

## 11. 建築関連団体との活動

### 11.1 AIJ-JIA 合同委員会（委員数(AIJ)：常任7名、委員会開催予定数3回）

日本建築家協会北海道支部(JIA)と合同委員会を開催し、両団体の活動についての情報交換および合同企画について協議する。ジョイントセミナーについては継続して行うように計画を進める。

### 11.2 北海道建築設計会議

10団体により構成されている本会議は、建築確認制度や建築士制度など、主に建築業界に共有の課題について、引き続き情報交換や意見交換をおこなう予定である。

## 2010 年度収支予算案

北海道支部

(単位:円)

科目名称	予算額	前年度予算額	差異	科目名称	予算額	前年度予算額	差異
<b>事業活動収支の部</b>				<b>事業活動収支の部</b>			
1 事業活動収入				2 事業活動支出			
(1) 特定資産運用収入	( 9,000 )	( 16,000 )	( 7,000 )	(1) 事業費支出	( 4,915,000 )	( 4,490,000 )	( 425,000 )
特定資産利息収入	9,000	16,000	7,000	研究集会事業費支出	( 2,150,000 )	( 2,250,000 )	( 100,000 )
(2) 事業収入	( 2,405,000 )	( 2,400,000 )	( 5,000 )	研究集会事業費支出	2,150,000	2,250,000	100,000
研究集会事業収入	( 2,200,000 )	( 2,200,000 )	( 0 )	講演会・展示会費支出	( 550,000 )	( 490,000 )	( 60,000 )
研究集会事業収入	2,200,000	2,200,000	0	講演会事業費支出	520,000	460,000	60,000
講演会事業収入	0	0	0	展示会事業費支出	30,000	30,000	0
受託事業収入	0	0	0	調査研究事業費支出	1,455,000	990,000	465,000
その他の事業収入	205,000	200,000	5,000	表彰・顕彰事業費支出	( 760,000 )	( 760,000 )	( 0 )
(3) 寄付金収入	( 0 )	( 0 )	( 0 )	表彰関係費支出	720,000	720,000	0
基金寄付金収入	0	0	0	設計競技費支出	40,000	40,000	0
(4) 雑収入	( 254,000 )	( 254,000 )	( 0 )	委託事業費支出	0	0	0
雑収入	( 254,000 )	( 254,000 )	( 0 )	(2) 管理費支出	( 5,767,000 )	( 5,770,000 )	( 3,000 )
利息収入	4,000	4,000	0	会議費支出	( 270,000 )	( 270,000 )	( 0 )
その他の雑収入	250,000	250,000	0	総会費支出	200,000	200,000	0
(5) 他会計からの繰入金収入	( 7,337,000 )	( 7,017,000 )	( 320,000 )	役員会費支出	60,000	60,000	0
基本部門からの繰入金収入	( 5,479,000 )	( 5,159,000 )	( 320,000 )	運営費支出	10,000	10,000	0
支部費収入	1,414,000	1,409,000	5,000	給与手当支出	1,750,000	1,750,000	0
経営助成費収入	2,010,000	2,160,000	150,000	福利厚生費支出	300,000	300,000	0
事業促進費収入	1,015,000	550,000	465,000	退職給付支出	0	0	0
支部研究補助費収入	200,000	200,000	0	通信費支出	177,000	212,000	35,000
教育文化事業交付金収入	540,000	540,000	0	印刷費支出	115,000	50,000	65,000
支部事務費収入	300,000	300,000	0	消耗品費支出	57,000	90,000	33,000
会館部門からの繰入金収入	( 1,858,000 )	( 1,858,000 )	( 0 )	電算費支出	0	0	0
支部事務所費収入	1,858,000	1,858,000	0	雑費支出	445,000	445,000	0
				事務所費支出	2,653,000	2,653,000	0
<b>事業活動収入計</b>	<b>10,005,000</b>	<b>9,687,000</b>	<b>318,000</b>	<b>事業活動支出計</b>	<b>10,682,000</b>	<b>10,260,000</b>	<b>422,000</b>
投資活動収支の部				投資活動収支の部			
1 投資活動収入				2 投資活動支出			
(1) 特定資産取崩収入	( 590,000 )	( 290,000 )	( 300,000 )	(1) 特定資産取得支出	( 60,000 )	( 60,000 )	( 0 )
特定資産取崩収入	( 590,000 )	( 290,000 )	( 300,000 )	特定資産取得支出	( 60,000 )	( 60,000 )	( 0 )
学術振興基金引当資産取崩収入	290,000	290,000	0	学術振興基金引当資産取得支出	0	0	0
支部基金引当資産取崩収入	300,000	0	300,000	支部基金引当資産取崩支出	0	0	0
退職給付引当資産取得収入	0	0	0	退職給付引当資産取得支出	60,000	60,000	0
<b>投資活動収入計</b>	<b>590,000</b>	<b>290,000</b>	<b>300,000</b>	<b>投資活動支出計</b>	<b>60,000</b>	<b>60,000</b>	<b>0</b>
財務活動収支の部				財務活動収支の部			
1 財務活動収入				2 財務活動支出			
<b>財務活動収入計</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>財務活動支出計</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
				予備費支出	253,000	202,000	51,000
<b>収入合計 ~</b>	<b>10,595,000</b>	<b>9,977,000</b>	<b>618,000</b>	<b>支出合計 ~</b>	<b>10,995,000</b>	<b>10,522,000</b>	<b>473,000</b>
<b>当期収支差額</b>	<b>400,000</b>	<b>545,000</b>	<b>145,000</b>				
<b>前期繰越収支差額</b>	<b>1,000,000</b>	<b>1,000,000</b>	<b>0</b>				
<b>次期繰越収支差額</b>	<b>600,000</b>	<b>455,000</b>	<b>145,000</b>				

### 基金・積立金内訳

2009年度末(決算)		2010年度末(予算)	
支部基金	3,110,000	支部基金	2,810,000
災害調査研究基金	2,200,000	災害調査研究基金	2,200,000
学術振興基金	3,460,000	学術振興基金	3,170,000
職員退職積立金	540,000	職員退職積立金	600,000

北海道支部地域法人正会員・賛助会員名簿  
法人正会員

2010年3月末現在

会員番号	口数	会員社名・団体名	会員番号	口数	会員社名・団体名
00503-64	1	伊藤組土建(株)	00547-58	1	戸田建設(株)
00505-34	2	岩倉建設(株)	00553-56	1	(株)巴コーポレーション
00505-50	2	岩田地崎建設(株)	00557-04	1	日鐵セメント(株)
00512-89	3	(株)大林組	00614-45	1	日本データサービス(株)
00512-97	1	(株)大林組	00555-50	1	西松建設(株)
00515-72	1	(株)岡田設計	00560-51	1	(株)日本設計札幌支社
00567-92	2	北電興業(株)	00561-82	1	日本防水総業
00517-00	5	鹿島建設(株)	00573-66	1	(株)三菱地所設計
00611-61	1	曾澤高圧コンクリート(株) 技術部	00625-81	1	(株)アトリエ・アク
00614-38	1	(株)ホーム企画センター 総務部	00586-89	1	北農設計センター
00523-82	2	(株)熊谷組	00597-74	1	(株)総研設計
00568-23	2	(株)北海道日建設計	00616-32	1	(株)北方住文化研究所
00571-46	3	丸彦渡辺建設(株)	00568-07	1	(株)ドーコン
00540-41	5	大成建設(株)	00618-60	1	北海道建築設計監理 (株)
00575-10	1	宮坂建設工業(株)	00568-15	2	北海道コンクリート 工業
00544-49	2	(株)竹中工務店	00531-84	1	清水建設(株)
00674-76	1	(株)間組 札幌支店建築部	00538-83	2	(株)田中組
00656-02	1	坂本建設(株)	00674-50	1	(株)中原建築設計 事務所
00659-11	1	(株)都市設計研究所	00684-14	1	(株)三暁プレコン システム
00674-84	1	五洋建設(株) 札幌支店	00685-29	1	(株)北海道不二サッシ
00549-52	1	東急建設(株) 札幌支店	00704-45	1	(株)アトリエ・ブンク
00710-77	1	(株)久米設計札幌支社	00704-09	2	(財)北海道建築指導 センター
00684-22	1	(株)北海道サンキット	00708-51	2	北海道旅客鉄道(株)
00724-63	1	(有)エヌディースタジオ	00721-70	1	(株)土屋ホーム

## 賛助会員

会員番号	口数	会員社名・団体名
00814-70	3	北海道電力(株)
00810-06	1	道都大学附属図書情報館
00813-49	1	(株)NTT ファシリテイ ーズ北海道支店 営業推進部
00815-01	1	北海学園大学附属 図書館
00815-19	1	札幌建築デザイン専門学 校
00847-03	1	(株)総合資格



社団法人 日本建築学会北海道支部

〒060-0004 札幌市中央区北4条西3丁目1  
北海道建設会館 6階

TEL.011-219-0702 FAX.011-219-0765

E-mail: [aij-hkd@themis.ocn.ne.jp](mailto:aij-hkd@themis.ocn.ne.jp)

<http://news-sv.aij.or.jp/hokkaido/>